

僕、と言つ名の誰が悪いのか？

齊藤 夢（サイトウ ユメノ）

## 【prologue】 - 手紙

拝啓、前略、謹啓、冠省、…私は知りませんでしたがそれらは全てそれに違う意味を持つていてるのですね。全然知りませんでした。それに驚くべき事に『、（句読点）』は使つては行けないと書つ事らしいのです。全く知りませんでした。社会人になって少し経ちましたが、今更というような驚きを隠さずには居られないところです。

こんな風に長々と書いてしまっては、前略なんて意味は無いのかも知れませんが、季節の言葉などを使った挨拶等をしていないのできっと大丈夫ですね。

前略 時下ますます「盛栄のこと…」

お母様にこんな風に書くのは少しおかしい事ですね。

書きたかつただけなのです。

それだけなのです、ですからあまり気にしないで下さい、これに対しての修正の手紙は私には届きません。

何でもいいです。

ここにちはお母様。

久しぶりというかこのようにして改まつたお手紙を書くのは初めてのことかもしれませんね。

改まつたと言つにしてはあまりにも乱暴な書き始めかもしませんがそれは私がマナーやらすな故、お許し下さい。社会に出れば私ももう少しもともな人間になると思っていたのですが、云々。

長くなりそうなので割愛させて頂きますがよろしいですね？

お母様からは遠く離れた娘の私へ多くの手紙を送つていただきましたが、それは心配からだったのでしょうか？義務であったのでしょうか？私にとってはどうちらでもよいのですが、どちらかといえば後者のほうが少し気が楽ではあります、前者のほうが申し恥ずかしいところであります。

どちらにしても気に掛けてくださっていた事は事実としてそこには残っているのですね。

私のほうからはいつも『楷書はやめて、読めないから』とか『わざわざ記念切手を買うために旅行しなくてもいいから』とか『封筒に入るからといって干し柿を入れるのはやめて』など、心からの言葉をお母様に電話口で伝えることが日常でした。そうでもっぱら電話でした。

私のほうからこうしてお手紙を書き差し上げることは一度もなかつたかと思います。もう少し掘り下げる、上京した私からこのようにして改まってお手紙を書くことは無かつたと思います。

小さい頃のことは忘れてください。あれは私の小さい頃のことであつて私そのものとは違います。今、お母様がオーバーライドされているそれは私ではありません。

勘違いしないでください。

それは私ではなく、私の小さい頃の影なんです。

…そう、すべては影なんです。

でも影の話は後でいたします。といつても、その話はすぐにしなければならない事になると私は感じています。

まずは世間の話からしましよう。近況です。または私がどんな風にして生きていて存在しているのか、お知らせしようと思うのです。

シリアルスな話をする前にどうしてもリラックスした気分になつておかなければならぬいと思う為です。そうしないこと事には上手く話せるはずの事も十分な力を持って伝え事が出来ないと考えるからです。

ここだけですからほかの人には恥ずかしいので言わないでいてほしいのですが、お母様にだけ箱の話をできる気がするのです。

話がそれましたね。

お母様が思つていらっしゃるように心配してくださいたとおり、私は社会の中では少し浮いた存在として今生きています。

確かに私は今お母様が肩を落とされる姿が見えたような気がしました。娘はあなたの娘です。

ですからそこでは落胆しないでください。

そこで手紙をおかれたらこの手紙のうちの九割が読み捨てられたことになり、大事な部分はわからないままやむやになってしまいます。もしかすると大事な部分はほんのワン・センテンスでさりとて書かれているかもしれません

何だからだと最初に頭語を並べたり、近況にならないようなくだらない事を書いたりするのはどれが正しいのかわからない」ともありましたが（そして私が混乱している事もあるのでしよう）、一言でも多くの言葉をお母様に届けたいと思うことの一からで

す。

頭語については、最近そういう漫画やアニメや…まあそういうものが多いのです。お母様がわかるものでしたら、クロマキー高校という漫画が私の部屋にあったと思うので、それを聞いてみてください。主人公の苦悩がお母様に宛てて書かれているはずです。

私も青春の大部分についてクロマキー高校があつたからこそ自分という個性が形成されていると思つ」とあります。

冗談です。

もしここでお母様がそれを信じられるようでしたら、娘の私としても考えがあります。クロマキー高校のことについては、この手紙を読んできっと私に電話するでしょうから、それが終わった後に、読んでみてください。

信じられないほどくだらなく、しかし最高のエンターテイメントがそこにあると私は思いました。その私の感覚を、お母様と共有したい。

『あなたと合体したい!』というフレーズのアニメがはやりましたね。

知りませんか。別にかまいやしませんよ。

ああ、また私について腐女子だ何だと、見知ったような口で私に言つてくるのでしょうか?

わかります。

わかりたくありません。一言で片付けてほしくないのです。

アニメや漫画が好きな私はコスプレをして公園で踊り狂い、動画投稿サイトに自分の作った料理などとは別アカウントでお絵かき風景などをアップロードするような毎日でしたが、そんな私でもヲタクというにはヌルイ。厳しい世界なのです。どうかご理解をお願いします。

ヲタクの人たちは、確かに对外的に見て（そしてそれを目指そうとした私から言うのも何ですが）気持ち悪い人たちばかりです。でも、ひとつの方を追求する道を進むのと似ているような感じがします。

ですので、それらに対してもよく知らないのに苦言を呈するような輩（お母様です）はクズです。お母様とお母様が敬愛する宮本武蔵、武蔵とヲタクは同じように道を進め

んとする猛者。同志なのです。

以後気をつけてください。

で、文章の頭に頭語をおき、その後あまり関係のなさそうなことをぐだぐだと書くのが最近の流行のようあります。これは私が読んだ少ない文献（基本的にはライトのベルです）から得た統計的な知識です。

「ここまで書きましたがお母様、干し柿はいただけません。

封筒がぐつしょりしている様相を想像できますでしょうか？

もしできるようであれば、今後はどなたに対してもああいうやり方はやめたほうがいいと思います。

私からの確かに正しいアドバイスです。

そして本題はやっぱり一瞬です。

今私は狙われています。

文頭で触れさせていただきましたね。

影です。

私の影が私を狙っているのです。

確かなことは何一つなく、私の妄想であれば「これはなんと云つことはなく、精神科に行けばすむ話しなのです。（実際精神科にもいってみました）

でも、これは違うのです。

影が、私を、殺したのです。

書きたい事は一瞬で終わってしまいますね。私がお母様に言いたい事は本当に短く、無味乾燥としているたつた一文だけだったのです。

【1】 匿名そして密告

◆一一

ガサガサという音がする。

僕は思わず曲がり角の電柱に身を潜めるが、ここは繁華街だ。  
どこに隠れようとしても、誰かの視線がある。

この視線から逃れることができないでいる。

潜めた逆方向からは僕は潜めていくなく、まる見えであり、いつそこの電柱の下にある石ころぐらいの大きさになることができれば気が付かれることは少なくなるかもしれない。

そういうえば最近ではめったに石ころを都会で見なくなつた。

最近といつても昔のことなんか知らない。

ポケットの中でケータイがバイブする。

バイブするという日本語が正しいのか僕はわからない。

隠れるのが飽きた僕はその電柱に寄りかかり、携帯電話を開いた。

件名：やばいことになった 本文：合流したい k

知らないアドレスからのメールだった上に友達が極端に少ない僕にとってkと付く人間は一人としていなかつた。

メールからは緊迫感しか伝わってこない。

僕は次のようなメールを送信した。

件名：電柱に隠れている 本文：合流はできそうもない。僕のほうもやばいんだ t  
tとは、僕の名前からとつた。決して対馬の t ではない。

こういうメールは特に意識せずに受け流してしまうのが得策だと考えている。メールなんていう文化は最近できたものであつて、それ自身に対するモラルだ何だというのは跡付けの考え方であつて、既存のルールが適用されるとは限らない。

メールが来た。

件名：俺は佐藤じやないのに 本文：t、君は佐藤か？なぜ狙われる？k

俺は返事を書く。片手で、できるだけ自然に、自分自身の焦りを相手に見せてはいけない。

件名：t だ。 本文：佐藤ではない

こいつはそつか、別の本の影響を受けたのか。

視線と書いたが、本当に視線かどうかはわからない、そこには何らかの僕をミルモノがあり、それはどこの角度にあるのかはわからない。どこの曲がり角でそいつと出会う

のかわからない。僕が無防備であればあるほど。視線というか、その気配は僕に甘くす  
り寄ってくるのだと、僕は認知している。

ところで佐藤、佐藤？

ああ、なるほど、佐藤ということはベストセラーになつた割りに書評や読者の感想が  
あまり芳しくないあの本だな。かわいそうに。

どうせなら僕のように全く正体のわからないものから追われるような本のほうがよか  
ったのに。

何故に「」をどうして佐藤なんて言葉を使つてしまつたのだろう？

それとも佐藤の雰囲気を感じたのか？

何だ、佐藤の雰囲気とは。

十一月も終わる、季節はもう冬といつてもいいだろう。

僕は薄っぺらいコートを着て家を出たまま、風呂に入り服を着替える以外家に帰れな  
くなつてしまつた。

夜は公園で寝、ネットカフェで過ごし、たまにチラ豪華なホテルに泊まつた。  
仕事はしている。

と、いうか、世には奇妙な制度があるので、僕の通つている学校には秋休みという  
ものが存在している。そしてそれらは本来十月にあるべきなのだろうが（そのように世  
の中の人たちが言つていた）、十一月の暮れころに十日ほどぽつかりと暗く深い井戸の  
ように存在している。

今はその休みだ。

そして僕という存在はフリーランスという肩書きを持つただのしがない三流大学の  
学生である。一浪もしなければ、一留もしていない。二十一歳であるから学年で言えば  
四回生に相当するのだろうが、単位は二年のうちにほとんどとつてしまつたことで、学  
校にはゼミでの集まりがない限り顔を出さない。と、言うか学校に行く事に対する意味  
がない。

だからというわけではないが、高校生の頃からのんべんだりとはじめたフリーラン  
スの仕事が立て込んできている今、僕自身に学生という肩書きはどうも合っていないよ  
うな気がしている。

イラストレーションの仕事を始めてもう4年になるのかと自分のキャリアについてた  
め息をついた。

最初のオファーは有名ではない小さな出版社だった。イラスト一枚3000円という  
仕事だったが、評価がよかつたのか次のイラストレーションからは一枚6000円にな  
り、カラーはその倍額を支払ってくれた。もちろん仕事によってその単価は変動するか

ら、一概に「こうという事はいえない。大きさによつても納期によつても単価は違う。だが、仕事があるという事だけははつきりと言える。

一月の収入が仕送り額を超えるようになつた頃、僕は親に進んで仕送りを家賃のみでいいという電話をした。

切り詰めることが自分自身に対してどのような影響を及ぼすのかわからない。

しかし僕はそのようにして自分自身の稼ぎで自分のほとんどの生活がまかなえることを知つた。

イラストレーションとはいってもさまざまであるが、僕がやつているのは主にライトノベルと呼ばれるジャンルの小説における挿絵と、カバーイラストである。

有名作家人のイラストは担当したことがないが、相当な数のイラストを描いた。

そして今でもその営みは続いている。

学生であつたことから僕自身はほかの人のギャラを知らない。担当に聞くこともない。僕は出版社から依頼を受け、それを期日までにこなすことが仕事であり、提示された金額の請求書を送る。

と、言うような事を僕に興味を持つた人が僕自身について尋ねてきたときに使う方便だ。学生であることはどうそである。単なる嘘をつくのに便利な道具だから利用しているにすぎない。

他の人のギャラなど興味がないから聞くしかないだけだ。

このまま卒業したら少しは興味もわくのかもしれない。

上昇志向というのだろうか？圧倒的に僕にはそれが欠けているように思う。

そして今僕は追われている。

それだけが簡単に今の僕を象徴する状態である。

## ◆一一一

「願いつてかなうと思うよ」

「そのために願いがあるんだから」

「夢だってかなうと思うよ」

「かなつたら夢じゃなくなつちゃうけれども」

私はその子の言葉をひとつずつ整理してみた。

元凶なんてどこにあるのかわからぬけれど、その子のノートには力があること。

私を取り囲む状況はあまりよくないらしくこと。

私の近くにいた彼女は私にたまにそう言って注意を呼びかけてくれた。

ありがたい事に彼女は私の友人だったのだ。

そして私も彼女の友人で。

新聞はなぞの連續失踪事件を取り上げている。

なぞは謎のままではなく。基本的にはほとんどすべてで解決している。

だから謎とは言つても謎ではないのだ。事件そのものに謎めいたモノはなく、その裏側の仕組みがとても謎めいている。前例がないのだから謎だと言つても不思議などころではないのだろうが。先ほども言つたように、基本的には。基本的にはとはいうのはパターンが三つでほとんどすべての事件は幕を引いているからそういう言う印象を感じさせる。

失踪、その後死体で見つかること。

失踪、その後ひょろりと家に何事もなく戻つてきていること。

失踪、その後奇妙な発言を繰り返したり、発狂しているところを取り押さえられ発見される」と。

殺されているのは基本的に発狂した人が手をかけた痕跡を残している。だが、発狂している人間に何かを淘汰どころでまともな答えは返つてこない。作り返す言葉に関連性はない。

事件は公表されているだけで三百件以上。発表されている割合からみると上のパターンが三分の一ずつにかっちり分かれている。

被害者（殺されて見つかった）二人につき加害者（発狂した人間）は一人という割合。割合が合わないから、発狂した人間の中には誰も殺めていない可能性があるが、被害者の衣服であったり、生体反応であったり、痕跡であったり、どこかで一致していることがほとんどであり、何らかの可能性があることは否定できない。

しかし、基本的にその物理証拠以外に被害者と加害者を結ぶ紐がない。

だが私がを含む一般大衆の多くは真ん中であげた。パターンが最も気味が悪く、うすら冷たいものを感じているらしかった。

テレビでは連日のように『ナゾの失踪事件を追う！』などという特集が組まれているぐらいだ。

薄気味の悪いところは一言で言つてしまえば、いない時間というものがまるで透明人間だつたように当たり前のように戻つてくる所にあるのではないだろうか。

同居人はさまであるが、ある両親はあまりに拍子抜けし、ある奥さんは浮気だと信じて疑わず。

だが彼らは等しく、帰ってきたときに、居なかつた事を本人に問うと、

『ん？ 何かあつたの？』

というようなことを聞くらしいのだ。

どういうことだろう？

昨日まで全く居る存在のないものがそこについて、あるいは寝ていたり、食事をしているのが、気が付いたときには当たり前のように（元々の日常がそうであつたように）目の前で行われているのだ。

言葉として前述の文章がおかしいことは承知しているが、奇妙さを伝えるにはこのようになることしかできない。

奇妙なのだ。

語弊を恐れずに表現するならば最も近い現象は神隠しであるような気がする。

しかし、三人に一人は殺されているということ、件数が多くることで大事な何かを見落としてしまっているような気がしてならない。人の気が付かないこと、気づきようもないこと。

もつと単純で、もつと端的で・・・。

私は彼女のノートをもう一度開いてみた。

そこには何かが書かれているわけではない。ただただ日記用の散文のような、思春期の女の子によくあるらしいひとつ傾向をつづったノートだ。

その所感に目新しいモノはなく、『絶対に誰かに見られたくない！』と思つてゐる事が書かれているノートなのだ。

もつと判りやすく端的に言えば特筆することは一つとして書かれていない、無意味で、だれだれが気になるだの、部活動で困つてることがあるだの、そういう「」とが書かれている。

私がこのように彼女のノートを見られる」とはまた後で書きたいと思う。  
いや、書かないかもしれない。  
書かなくても良いような気がする。  
だつて私たちは友達なのだし。

彼女のノートには明らかにそのノートの本題と外れた事が書かれている事がよくあって、それに気が付いたときに、そのノートを端から端まで読もうと思った。  
彼女はもう殺されているし、もう一度と戻つてくることはないはずなのだ。

『夢はかなうと思つよ。叶つてしまつたら夢じゃなくなるけれども』

私は声に出してその一文を自分なりに租借しながら自分の中に適応させてみようとした。

でもうまく自分で理解することはできなかつた。

マークすることができない。

心に赤いマークは付いたままだつた。

私はそのノートを自分のかばんに納めると、彼女のいすから腰を上げて伸びをした。

窓の外はすっかり冬の様相を呈していた。

この瞬間にも人は消えている気がする。

木々は葉を散らし、人々はかさかさ落ち葉を踏んで音を鳴らした。

美しい季節だ。

もうすぐその黒く垂れ下がつた黒い雲からは雪が降り、世界を白く染めてゆくのだろう。

私はその白銀の世界で、足元に気をつけながら歩くのだろう。

かばんの中のノートに力があるのかはわからない。

けれど、ひとつだけわかっていることは、彼女は死体で発見された第一人者という」と。

そして私自身が何事もなく帰ってきた失踪者であるといふことだ。  
ここに明確な違いがあると思えない。

### ◆ 一一三

「まつさかさまに落ちていく夢を見たんだよね」

彼女は僕にそういった。

携帯型のゲーム機に夢中だった僕は彼女の言葉を「うまく聴く」とができなかつた。

「へえ」とだけ答えたような気がする。

「リアルな夢だったな、あんな怖い思いをする」とってなかなかないと思うんだ

「大げさだね」。ピコピコ。

「そういうのって予知夢みたいなものだと思つ? 私はそう思つたんだけどな…あんなリアルな夢、普通見ない」

彼女はどんな顔をしていただろう?

「わからないけど、違うと思うな」

と僕は言った。ピコピコ。

「どうして？」

「まつさかさまに君が落ちちゃつたら、君はこの世からいなくなっちゃうでしょ」「えうだね」

「そんなセカイに僕はいたくないからさ」「ピコピコ。

「またー、恥ずかしい」とを言つて

彼女は笑つた。それから彼女は続けた。

「もし本当にそう思つてるならそんなゲーム機を見つめていいで私を見てくればいいのに」「うう

と。

確かにそのとおりだと思った。

どうして僕は彼女を真正面から見ることができなかつたのか。

「私のいないセカイで君はどんな風にして生きてゆくのだろう」

ピコピコと言つた。

僕のゲーム機の中では主人公のレベルが上がつた。

「さあね」

掛け値なしの言葉だつた。

「うそ臭い」

彼女は笑う。

「本当だよ」

僕はゲームの画面から目を離さない。

「証明」

一呼吸置いて彼女はゆっくりとつぶやいた。

「証明は、…いや、それよりも、さ、君の私のいないセカイが気になるな…どんな風に息をしてどんな風な表情をして、どんな風に私のことを思い出すのか、私はそれを見てみたいな」

「だってさ、君は私のことちつともみてくれないもの…思い出せる私の表情なんてひとつもないでしよう? ねえ、こうして話してる私の顔だつて見てくれないんだよね、だから私にはわからない…私は気味のことじつと見つめてるから君がいなくなつた後でも、気味のいないセカイも結構想像できちゃうんだ」

「…いう言い方は悪いかもしけないけど、『私ばかり』と思われて私のこと嫌いにならるのはいやなんだけれど、それでも私は君の事割としつかり見てると思う…だけど君は違う、君は私じゃない誰かを見る、誰か、それが人間だったら私だってやきもちやいたりいろいろできたかもしれないけれど、そうじゃないよね、君が見てるものは

なんのかな？君は、何か遠くの……いや……なんでもないよ  
ふうという、息が「ぼれる音」がした。

「なんでもないんだ、私今変なこと言つてたね」

アハハと彼女は笑った。

「僕は君が思つているほどの変人じやないよ  
と僕は言つた。

ゲーム機を操作する指が止まっている。

「僕は君の事を、見てる」「

搾り出すように言った。

僕自身がその言葉がのどぐらい嘘なのか、全く把握できないままにそう言った。  
「知つてるよ、大丈夫」

「君の事が大事だ、君のいないセカイなんて、僕のいるべき世界じやない  
それは嘘じゃなく、掛け値なしに本当だった。

僕のいるべき世界と、彼女のことをよく見ている僕にどれほどの乖離があるのか、僕  
にはうまく図ることができなかつた。

今ならどうだろう……？

いや、やめておこう。

今は彼女との会話をしつかりと回想することに努めよう。

一字一句間違わずに思い出し、その声の重さと言葉の選び方に注意を払うんだ。

「君の事が好きだよ  
と彼女は言った。

「君は大丈夫だから  
と彼女は言った。

「君は一人でも大丈夫」

とも言つた。

だけど僕は弱虫だつた。

「僕は一人じゃダメだ  
と僕が言った。

「じゃあね、また明日  
と彼女が言った。

僕は何も言えず、遠くなる足音に耳を傾けていた。

「また明日・・・

僕はつぶやいた。

その声が耳に届く頃、彼女の足音はもう聞こえなくなつていた。

僕が顔を上げると、そこにはもう彼女の姿はなかつた。

公園の、真ん中の鉄棒で、高校生だった僕たちは日が落ちるまで話していた。そんな日常が当たり前だつた。

その次の日、彼女は公園に来なかつた。

よく晴れた木曜日、雲ひとつない青空で、暴力的な風が吹いていた。

後で聞いた話によると、彼女は自殺ではなく、その風に飛ばされたのではないかと聞いた。

学校の校舎、彼女の好きな屋上から彼女は落ちて、そしてコンクリートの地面にたたきつけられた。

あたり一面は血の海と化したらしい。

僕は伝え聞いた話だから、よくその話を聞いたときのことを覚えていない。

ただ、その前の日、彼女は家に戻つておらず、華族は搜索願を深夜に出していた。

その次の日の昼過ぎに、彼女が死んだ。

最悪な形で。そして見つかった。

だから、この一連の今も続く惨劇の引き金を引いたのは彼女なんじやないかと、僕は思つてゐる。

眞実は例え違う形であれ、僕はそんな風に信じて疑わない。

少なくとも僕の引き金を引いたのは彼女なのだ。

## 【2】自己紹介

### ◆一一一

丸めた体の節々が痛くなつてきた頃、僕はようやくその場所から出ることを決心した。相変わらずわけのわからないメールのやり取りはしているが、近くに危険がないことだけは確認できた。

街の人々が僕に投げかける好奇の目はもうなれてしまつた。それよりももっと邪悪な目をしたものに気を配らなければならないのだ。その目は僕を食べようとする。その目は僕を殺そうとする。僕を追い詰めるのは影だつたり視線だつたり、長く伸びた電柱の

其れだつたり、その形が本当のところどんな形をしているのかわからない。

件名：殺されていいと？ 本文：君はそんなふうに思つてゐるの？ k

何通か前のメールでkとやらは僕に向かつてそんなことを聞いてきた。好奇心だつたのか、それとも本心はあるのか。

彼が極限状態にあるとはいつても、少し、落ち着きすぎたメールではないだろうか？

落ち着きすぎている・・・？

そのとき僕はなるほどと思つたのだった。あと少しこの場所にいよう、きっとその後には何もないと。

そのときまた携帯電話が震えた。メールではないバイブレーション。

『新村』

と携帯電話のサブディスプレイには表示されている。

「なんだ？」

僕は電話に出た。

「俊弥、お前のことを見たつてやつからメールが来たぞ」

「へえ」

「新宿で何やつてんだ、また変なカツコで動けなくなつてるんじゃないだろうな？」

「変なカツコで動けなくなつてるんだ」僕はおどけた様子で新村に返事をした。

実際にぺろっと舌を出しながら行つたからかなりおどけた様子になつてゐるのではないだろうか。

「俺がこないだみたいにいってやるうか？」

「大丈夫だ。心配するな、天土俊哉にはこんなことなんないことない」

「名前は関係ないが……」

tとは僕の名で、苗字は天土（アマツチ）という。

自己紹介が遅れたが……とはいつても、僕の素性についてはほとんど先に述べてしまつたか。

「それよりも、また動けなくなつてたら困る」

「どうした？」

「どうしたじゃない」

と、新村真吾がまじめな口調で言う。

「締め切りだよ、お前未だ仕事先に納品物提出してないだろ」  
納品物とはイラストのことを指している。

「何をぶつぶつ言つてる？ 深刻なんだ」

新村のイライラが電話越しにもわかつた。

「わかつてゐる、データは家にある」

僕は自信たつぱりに答えた

「実はこんなこともあるうかとストックしてある分がまだまだかなりある」

電話越しのため息。

「センセイの気がまた変わったんだ」

「はあ？」

「先生の気が変わったから、あのキャラクタは使えない、あーーー、お前が打ち合わせをちょうどすっぽかした日に機嫌よさそうに先生は新しいキャラクタについてしゃべっていたんだ」

「まじか、でもそいつは主人公じゃないだろ？」

素っ頓狂な声だったと思う。

「いや、それが願つてもおらず主人公なんだ、シリーズ6冊目にしてまさかの外部主人公の起用」

「……こまつたな」

「明日までなんだ、二時間後にお前の家に行くからそれまでにそこから動けるようになつておいてくれ」

「それなんだけさ……新村のマシンに僕の環境移せないかな？」

と切り出した。

「家には帰れるんだが帰れないんだ」

「わけがわからんが」

新村沈黙。

「わかつた、とりあえずお前が分けわかんないのは今に始まつたことじゃないしな、お前の環境後と全部うちに運んでしまうぞ」と新村が言った「鍵は変わってないな？」

ちよつとしたことがあって僕は家の鍵を変えたことがあつたのだ。

「変わつてない…はずだ」

と僕は言つた。

「わかつた、二時間後にうちに来ておけ」

新村は電話を切る間際に

「どうせペントラブだけあれば何とかなるんだろうだが、今回はそういうことも言つてられないんだろうしな」

「悪いな」

電話が切れた。

何という柔軟さ。

僕は心の中で新村に盛大な拍手を送つていた。

でもそもそも僕は僕で此所から動けるようにならなければ何の意味もないのだ。

新村は僕の大学でのほとんど唯一といつていいほどの友人で、僕のイラストをきちんとした形の商品してくれた仲間もある。

今は出不精な僕の代わりに出版社とのやり取りをしてくれる、編集のようなエージェントのような微妙な立ち位置にいてくれている。

唯一無二な存在といつてもいいのだろう。

新村にとつても同じかもしれない。

いや、きっとそうであろう。そしてそうであつてくれないと困る。

終話ボタンを押すと何通かのメールがいつぺんにやつてきた。

すべて同じアドレスだ。

件名：そろそろやばい 件名：来る k 件名：来た 件名：違った、よかつた k

件名：油断はできない etc :

…いくらなんでも送りすぎだろう。

僕はいい加減うんざりした気持ちになつて、

件名：なし 本文：悪いがようやく僕のほうは動けるようになったみたいだ。仕事の関係でメールは続けられない。

という返信をした。

結果から言うと、この署名を忘れたメールのせいで僕はこいつと合流することになる。と、いうか僕の対応力のなさが、柔軟性の無さが、そして運命を引き寄せる奇妙な力が、と言い換えた方がよいのかもしれないが。

運命を引き寄せる？

僕は自分の言葉にぶつと吹いた。

そんなモノが僕にあると本当に思つているのか？バカみたいだ。  
自分を過大評価するのも大概にしろ。

## ◆ 一一一

野田未来はノダミクという読み方をする。

『漢字も四文字ひらがなも四文字と言う名前が少し変な感じじゃない？』  
と私に話しかけてきたのが、彼女、未来との始めての会話だったように記憶している。  
そんなことはないと、そのとき私は思つたはずだ。

結城沙希というなんとなく「どこ」にでもいそうな私よりもずっとかわいい名前だと思ったこともたぶん間違っていないと思う。

「どうしてそんな会話することになったのか思い出せないが、とにかくそんな話をすることがあつて、私たちは友達になつた。

きっかけなんて何でも良いのだ。

一度関係を持つてしまうとそれがどのような関係であろうが、自分自身の生活に直接響いてくるものである」とは知っていた。未だ中学生だった頃にお遊びのような大恋愛をした私はそれがもたらしたさまざまな障害に対して頭を働かさねばならなかつたし、もちろん神経を使つた。

そして気が付いたときには恋人だけが特別なのではなく、友達も先輩も先生も、両親も例外なく閨わりと言つものがある以上その力で引っ張り合わされることに気が付いたのだった。

私はとある日の昼下がりだった、季節はどうしても思い出せない。フローリングの床に寝そべって窓から見える太陽が雲に隠されてゆくさまをじつと見ていてるときにそう感じたのだ。

未来に初めて会ったときに、月並みな感想になるのかもしれないが、とても苦手な意識を持った。

容姿が端麗なわけでも、媚びた仕草があるわけでもない。「どこ」にでもいる、それこそクラスにはもっと目立つ女の子がいた。事実として。

その時はよくは知らなかつたが、きっと彼女よりも勉強のできる子はいるだろうし、スポーツができる子も、声が綺麗な子も、いるはずだと私はなぜだかそのとき決めてかかつた。

言つてしまえば凡庸な少女なのだ。

今考えると、未来はあまりにも私と同じような気配を持っていたのではないかと思う。同属嫌悪。

でも、私たちは友達になつた。

それはつまり、私たちは別々の個体であつたからだ。

そしてそれは未来が私よりも、それこそ私が震むほどの奇人であつて、私の予想を完全に覆してくれたからだつた。

未来が奇人であることは周知の事実ではない。

かといって隠している訳ではない。だけどそれはなんというか、とても厳かな気持ちにさせられるのだ。

神や聖人はもしくはそのように在ったのかかもしれないと思わせるような雰囲気が彼女を包んでいた。

でも、そんな簡単に神様や聖人がいることはありえないと片方の私は思っていたのだけれども。そんな厳かなモノでなく、彼女が身にまとうているモノは嘘っぽちな『何か』なのだと私は信じていたのだ。

今思うと、どうしてそこまで彼女の事を通常の人間としてみようと、自分が酷く頑張つて努めていたのだろう？

簡単に言つてしまえば彼女は予知能力のある（本人は否定していた）人間だった。  
それがなんというかひどく遠まわしなのだ。

『大体、佐々木君と里香ちゃんはなんとなく・・・あー・・・糸がね、あるんだよ』  
というような、日本語ではない言葉を使った。

基本的にはそんな感じ。

そう、そんな感じなのだ。

いくつかの例外を除くと、彼女の予想のような曖昧な言葉は的を得ていた。  
少し先のことは『なんだよ』で締め、過去に起こったことは『だった』と文脈を締めた。

過去に起こったことと入つても、ほとんど当人しか知らないようなそんなことだ。

でも、未来にはそれはなんとなく頭の片隅にあるらしく（英単語のようなものだと話していた気がする）ちょっととしたことを口にすることで友達を何度も傷つけてしまったことがあるらしい。

家族のことも同じように見え、自分を生む前の両親のことや、なんとなく両親がどんな風に老いるのかは、いつかの自分が知つてしまっているらしい。

そのためか、ひどく未来は友達を作るのを避けていた。

私が友達になることは彼女の中では見えない未来だったらしい、知らない発見と初めての未知との遭遇をしたという、そんな心持だったと、日記には書いてあった。（ホラ、

日本語が少しつたないところも、なんだか聖人っぽくはないでしょう？）

だから彼女は常に世界のなんとなくの全貌が見えていて、だから彼女はほとんど自分にしか日記をつけなかつた。

と言う事らしい。

『ブログでもやればー？』私は鉄棒で、スカートの端を使って何年かぶりに前回りをしながら未来に言った事があった。

『したらさー、あたるーってさ、出版社とか未来の事気に入っちゃって本とかになっち

やつて大変よろしいと思うけどな』

今思うとあれは私の失言だったと思う。

『『だめだよ、そんなことしたらいけないんだ』未来はまじめな顔で私に言った『だめつて決まりになつてる、そういうことをするとね、私が世界を創ることになつちやう、沙希はいやでしょ？私が作る世界なんて、考えるだけでぞつとしない？』

彼女は話を続けた

『小学校の頃にさ、自分は誰かの夢の中で生きていて、本当は自分なんかいないんじゃないかって思ったことない？私はあつたな…それで、そつちのほうがどれだけラクなんだろう、つて思つてた』

だけど、と一息ついて未だ彼女は続ける。

『そういう世界にいる人がどうじゃないんだつて自分で思つてる世界なのに、誰かのものなんて、ひどすぎるじゃない？事情を知つているのはほんの一握りの人達なんだよ？』

未来はため息をついた。

『私は嫌だな』

といつて彼女は目を閉じた。

「ごめん」

と私は言った。

そして心の底からそう思つた。

『めんね。ごめんなさい、軽はずみに未来を傷つけてしまったこと。  
友達を傷つける行為は大変よろしくない。

## ◆ 一一二

引き金を引いたのが恋人ではなく単なる偶然だつたことは僕にとつて全くの幸いなことではなかつたが、不幸なことでもなかつた。

僕は常に引き金を引き続けている。

F P Sと呼ばれるゲームの世界の中では延々と僕はサブマシンガンを片手に敵に特攻していく。

僕はネットにつながつてゐる誰かを殺し、そして僕は誰かに殺される。

ヘッドフォンからは常に人のうめき声と銃声が響いていて、やけに現実感のない地獄がそこ」に展開されている。

モニターに地獄。

ヘッドフォンから地獄。

部屋から出たらカップ麺という現実。

母親が食事を作ってくれるが、きちんとしたものは食べる気がしない。一応パジャマを脱いで出かけられるような格好はしているが、制服はハンガーに掛かつたまま。

正直なところ、僕は彼女の死をうまく受け入れることが出来ていないだけなのではないだろうかと思うことも少なくない。

「宗治、顔色が未だすぐれないみたいよ」

階段下の母が僕に向かっていった。

「いや、僕は単にゲームのしそうなんだ」

「ショックなのはわかるけど、ああいうゲームばかりやっているのはどうかとも思うしきちんと食べないと…」

「理李がいるときも同じようにゲームはやっていたよ、関係ないさ。食事については少し悪いと思っているんだけど、上手く自分の血肉になる気がしなくて、…我が儘を言つて『こめんなさい』」

母はじっと僕を見たままうつむいた。

「そういうえば、理李も母さんと同じことをいっていたな」

と僕はつぶやいた。

「黙っていたわね…いい子だったのに」

といって母は目じりに涙をためようとした。

「母さん、それはやめてくれと何度もお願ひしたよ」

「そうね」

と母は袖で涙を拭う仕草をした。

「ちょっと水を飲もうと思って出てきただけなのに、大げさだな」

といって僕は手をひらひらとさせた。

彼女がいなくなつてから僕は字面どおりの引きこもりになつた。食事と生理現象と、歯磨きと風呂以外は部屋から出ず、よっぽどのことがない限り家から出なくなつた。学校にも行かなければコンビニに行つたりもしない。

ゲームは買いに行く。

通販でも買えるのだろうが、日課であつたそれはやめることが出来ない。そのために毎日寝間着からラフだが、外出できる格好になつている。外に出るから世間的な引きこもりとは一線を画しているのか？ わからない。

わからないがどうでも良い。

その後決まって僕は『また明日』といつて別れた公園で携帯ゲーム機を握ってディスプレイをじっと見つめている。

ただしピコピコという音はしない。電源をつけていないから当たり前。

でも、その当たり前さを、僕は知らなかつた。

電子音とマシンの奏でるノイズ、気が付いたらそこにいた理李が話し笑う声、僕の世界は常に音かノイズが理李の笑い声に混じっていた。

だからそこにある公園での遠い静かな時間を、物心付いた頃から初めて経験したことになる。

一人で公園に来た初めてのとき、僕はそのゲーム機の電源をつけて、攻略中のゲームに取り掛かつた。しかしそれは興が乗らないという、その一言に尽きた。

全く面白くないゲームの電源を切ると、そこにはすっとした沈黙が待っていた。

遠くで自動車の音が聞こえる、遠くで誰かの話し声が聞こえる。誰かが走り、街が声を上げる。それは小さな小さな音だったが、僕にはまるで街が、世界がすべて沈黙してしまつたように感じられた。

僕は何年かぶりにその公園で泣いた。

最後に泣いたのはいつたいいつだつたろうか？

彼女がいないことで泣いたのだけれども、彼女がいないことが僕の引き金だった。

なんて無常だろう。

泣きたいと思うことを僕は誰にも要求しなかつたけれども、今こうして止まらない涙は理李が見たうどう思うのかな。

そうふと思つたときに彼女の顔を思い出そうとした。

でもだめだつた。

彼女の予言どおり、僕は彼女の顔のひとつも思い出すことが出来なかつた。

「ねえ、ほら言つたよね、思い出せないんじゃなくて君は知らないんだつて」と僕の口から彼女の台詞がこぼれた。

きっとそんなことを言うだろう。

「しつてるよ。判つていてるよ」

僕は言う。

理李が居たら苦しそうにも、なんでもない平坦な口調で続けるのだろう。無意味で無価値な僕に天使のように声を掛けてくれるのだろう。

彼女は僕にとっての天使だったのか？いや、天使と言うにしては少し平凡すぎて当たり前すぎる容姿の持ち主だったかな。でも僕にはきっともつたない女の子だったのだろうな。

きっと、今隣に現れたら、最後の日のように多弁に、永遠と思える時間を、彼女は僕に話しかける事に使うだろう。

そんな予言はいらなかつたのにな。

ただ、僕は君ともつと、もっと幸せな言葉を聞くことを、君が話すことを探んでいたのにな。

涙が思考となつて溢れ出し、僕の口はさつきの言葉が永遠に響くようにぴつたりと閉じられてしまった。

気が付いたときに回りは暗くなり、僕は両手で携帯ゲーム機を握つたまま、息苦しいことも忘れて泣いていた。

泣きながらも冷徹な僕は関係のない事を考える。

新作ゲームを買う。ペースつてどのぐらいだろう？僕は大体二週に一本ぐらいのペースだ。

引きこもりと入っているけれども、こんなアクティブライトな引きこもりはなかなかいないだろう。

学校には行かないけれども、もともと友達なんていないし、進学校の僕のクラスメイトは僕のことなんて心配しもしないだろう。

気丈なふうを装うのはそんなに難しいことじゃない。

僕は学校に行かないことで、ゲームをして公園に来て沈黙した。

携帯ゲーム機はもうずっと充電していない。とつくの昔に電源は入らない。

ねえ、もっと理恵の事を、彼女の事を考えなよ、そんな不真面目さじや何も伝わらな  
いよ。

ゲームの電源なんてどうでも良いじゃないか。僕

だが、習慣なのか電源を入れる行為をしてしまう。

本体側面のスイッチをスライドさせるタイプのゲーム機だから、かばんから取り出すと、オンにする仕草をする。

電源が、入らない。

苦だった

電源が、入った。

「

僕は呆然となつた。

電池マークに目をやると、電池マークがあるべき場所にアイコンがない。

ゲーム右端に『メッセージが一件あります』

僕は十字キーを操作して、メッセージウィンドウを開く。

何も考えていなかつたと思う。

『ソウジくん、君のセカイは変わったよ』  
そんな件名から、手紙は始まっていた。

一件関係のなさそうなところから妙なモノで、因果とは続いている。

幻覚とは自分で見るモノではなく、気がついたら見ていることが殆どなのだ、別の言い訳をするならば、それは自分自身の意識でどうにかなる」とではないのだろう。

科学的だ、科学的ではない。

起こる現象全てに理由を求めるとしていた欲求はブームと言う名前で言えば過ぎ去つてしまつたのかかもしれない

今でこそ何かが起ると化学的にどうだとか動機がどうだといった検査がなされるが、実は自分たちのおじいさんのその上のおじいさんぐらいまで世代をさかのぼれば未だ呪いだ祟りだといつていた時代なのだ。

もしかすると自分たちの孫の子供ぐらいになると化学なつてものは嘘になつていて、今偽科学なんて呼ばれているものが本当になつたりするかもしないな。などと僕はそのとき嘯いていた。

そのとき僕は子供で、未だ発狂はしていなかつた。

僕は十分に気をつけながら大人になつたような気がするけれども、大人になるということがどのようなものなのかうまく想像できなかつたためだろう。僕が気が付いたときには、もう十全に十分に非常に覆しがたく大人になつていて、十年前はどんな自分だったのか、

——子供だったことは確かだ。思い出せない。

そのようにこれほどまでに機を使つていた僕でさせそんな始末なのだから、世の中の人たちが自分の子供の頃のことを話すときにあるですべてを把握しているかの「とく胸」を張つている姿を見ると、不思議な気持ちになる僕をどうか許してほしい。

とにかくそのように言つてしまえるほどに僕はずいぶん自分の幼少時代の「ころのこと」を注意深く覚えていようとしたし、そのための実践もしたということなのだ。

例えば、日記をつけたり、テープレコーダーに吹き込んだり、物語を書いたり、絵を描いたり、ラブレターを残しておいたり、そういうことだ。

でも、僕は忘れてしまつた。

十分なだけの情報が手元に残ることがない。

僕はそれらを読み返し、同じ時間をかけて自分の声を聞いても、もうその頃自分がいつたいどんな風に考えて生きていたのか。…どんな神経伝達をしていて、どのくらいの呼吸を保っていたのか。僕は細部を忘れてしまつた。

トライアルを何度も繰り返した。

そして、気が付いたときにはしっかりと子供ではなくなつてしまっていたのだ。

それは突然やつてきた。

そしてそこから僕をもうどこにも動かそうとはしなかつた。

けれど、それも僕がまだ発狂するずっと前の話しだ。

そう、結局発狂していた間の時間のことなんて僕はすっかり忘れてしまっているし、それを根深くトラウマにしているのは僕自身ではなく僕の回りにいる人たちなのだ。

そう、結局のところ僕は彼らを苦しめることしか出来なかつたのだ。

「これから幸せにすることは、未来につなげるための、などと言うかつていいことではなくてただの言い訳なのだ。

僕たちは確実にに向かって歩んでいる。  
たどり着く、ゴールはそこしかない。

このタイミングで出てきてこんなことを延々と話してしまつて本当に申し訳ないと思つている。

僕は廻濡燐命。メグリヌリンメイと読む。

そのメグリヌたる僕は、長々と語つてしまつたように何のためにか子供の自分を大事にしていた。

けれどそのメグリヌは僕の子供たる時間を確実に取り上げて言つたのだ。  
子供たろう時間を無邪気に過ごごさず、今と同じような冷徹とも言える面白みのない僕が取り上げ、日記に書き綴り続けた。

『本当に大切なもののつて、何？主觀でしかないんだとしたら君自身は君自身のことをずっとよく見てたんだからわかるよね？わかるはずだよね？』

とある日の僕が僕に言つた。

それはひどく殺風景な心象で、それは僕の僕自身の子供だったのだろう。  
夢の中か、白昼夢か、忙しすぎて幻影を見たのか、それは幻聴だけだったのか。  
ただただその声は乾いていて、僕は自分ののどが干からびたいどのようになつていてことに気が付いた。

『わからない』

と僕は言つた。

『ふむ、それはおかしなものだね、僕はもう行くよ、君は大人にでもなるといい』  
と彼は言つた。

そして僕は大人になつた。

僕はその後自分の血液分もの水を飲んだ。

くどいようだがそのときの僕は未だ発狂していなかつた。

僕が今ここで話していることは特に意味はない。

だけど、君はもしかすると一連の事件について、どうして？なぜ？と考える」ことがあるかもしないと思ったから。

僕はそれを経験し、そして通り過ぎた。

僕にとつてはその事件はもう通り過ぎてしまったことなのだけれども、君がそれを聞きたがっているからね。今度は断定だけれども、それは二つ前の台詞を僕が発したときの君の顔があまりにも興味深そうだったからね。失礼だとおもつたけれども『本音』を聞かせてもらつたよ。

そうだね、君は知りたがつている。

事件の全貌と、解決方法と、何が謎であるのかを。

君たちが呼んでいる呼称を使うのならば僕自身を形容する言葉は一つ。サイキックとなるだらうね。

でも僕自身はあまりそれを好まない。

僕は僕自身を評価できないのだから、その肩書きはどれをもつてしても足りず、どれをもつても過ぎた大きなもののようにも思つからだね。話がそれてしまつた。

メグリヌの僕が自分自身が発狂していることに気が付いたのは、自分自身について何の記述もしなくなつたことに気が付いたときのことだ。

そのとき僕は何もメモをするものを持っていなかつた。

ふとした買い物を頼まれて、まず胸ポケットに刺さつていてるボールペンを探してみた。すると無いんだ。

だから僕はいつも入れていてる内ポケットの万年筆を取り出そうとした。

しかしそれも無かつた。

仕方なく財布に入れてあるカード型の携帯用ボールペンを取り出そうと思つて財布を開けてみた。

僕はかばんから財布を取り出したんだが、不思議なことに気が付いたんだ。

財布の中にはノートのようなものが一冊も無い。

ペンケースも当たり前のように無く、ペンの類も一切刺さつていないんだ。

これはおかしいと思いながら財布を取り出した。さつきまで使つていた財布だよ？

その財布にはきっとレシートの一枚でもあるだろう。僕は未だそんなことを思っていた。

財布を開けるとやはりボールペンは無かつた。

レシートはおろか、紙のカードの一枚も入っていない。すべてプラスチックかラミネート加工されたものだけなんだ。

そんな日もあるだろうと、

…あるわけも無いのだが。

あるかもしれないと思って、僕はその人をまたして携帯電話を探したんだ。  
携帯なら僕、メグリヌでもメモを取つことがあるからね。  
でも、無かつた。

三台持っていた端末のうち二台が電池が切れたことを理由に家においてあったことは覚えていたのだけれども、仕事で使つてているメインの携帯電話は忘れたことは無いと、思い込んでいたようなんだ。

そう思つて僕は最近の自分ではなく、最近の自分を取り巻く環境について考えてみたんだ。

そうしたら確かにその人たちは僕を見て変な顔をして居たんだ。

僕は見てのとおり少し変わつてゐるし、少し変わつた名前を持つてゐるんだろう？

大丈夫、自覚はしているんだ。

だけど今回ることは多分その自覚があだになつたんだと思う。まあ、ひとつ要因として、としか捕らえてもらわなくていいと思うのだけれども。

そのほかの要素がありすぎるからね、わからないんだ。本当のところどうなつてゐるのか。

また話がずれてしまつたね。

つまり僕は慣れてしまつていたんだね。そういう人の表情や仕草に。  
でも、目の前にいるのは随分同じ時間を過ごしてきた同僚や先輩だ。

確かに彼らも最初は変な顔をしていたような気はする、でもそんなのって最初だけで、その当時はもう彼らも慣れていたからね、そんな顔は日常の中で見せなかつたはずなんだよ。

でも、彼らは僕にそんな顔をしていたような気がしたんだ。

僕はメモが取れないことに気が付くとともに、そういう周りの状況を照らし合わした時に、その奇妙さがある一定のラインでぴったりとくつつくことに気が付いたんだ。

凄く単純でシンプルな事だった。

僕は仕事をしていない。

わからない。

随分前から仕事という名前の仕事をしていない、と言う事。

僕がいた部署は生産部署だったからね。

メグリヌでも、モノを作ることは出来たんだよ。

でも、そのとき僕は何も生産しない、口だけを動かす人間になっていたことに気が付いたということなんだ。

何年も十何年も変わらずに続けていた事をやめて、生産活動そのものをやめて、回収もすることはやめて、そしてそこで僕は何もしていなかった。

そして気が付いていなかつた。

何度も繰り返しになつてすまないね。

そしたら僕は気が狂つてしまつてしまつていたみたいなんだ。

世界が変わってしまったことに気が付いたとき、それを元に戻す術は僕は持つていてなかつた。

なぜそれが起こったのかわからない状況では誰でもが何も出来ない状況というのが存在するよ。

そういうものはたいていにおいて嘘だと思っていたのだけれども。

その後のことは夢のようで、もう僕じやない誰かだった。

本当は今こうして話しているのも、以前の自分とは違つてしまつた何かなんじやないだろうかと正直思つけれども。

そのときの僕の混乱はこんなものでは無かつたんだ。

だから、僕の手で殺めてしまつた人にはすぐ申し訳ないけれども、僕自身ではない僕が、そこには居たんだ。

いくらサイキック力だろうと僕にはあんな動きは出来ないし、今ももちろんやってみるといわれても出来ない。

なぜならあれは僕ではないからだ。

手にかけた人数の多さと名前とその劇場型な凄惨な殺人は確かにマスコミを沸かした

けれども、そして僕の記憶にはその映像は残っているけれども、そのときの手の感触はあるでない。

いや、正確にはあるのだけれども、ノイズが多くてきちんとした正確な描画が出来ないんだ。

警察の人には何度も聞かれたけれども、そのたびに証言が異なつていると怒られるんだ。

でも、仕方ない。

わからない事を聞かれても、上手く答える事なんてきっとムリだろう。

それよりも、僕は人を殺したはずなのに、今はこうしてぴんぴんしている。そのときのことは、単なる記憶でしかなくて、僕が気持ち悪いと思うところは、それがまるで映画のように断片的であるところだ。

メグリヌは最初にも言ったようにひどく記憶を大切にしているからね。

そんなショッキングな出来事をサンプリングしないわけがないんだ。

たとえその後にその情報を活用する場所がないとわかつっていても、そんな思い切った行動をした僕はメグリヌとしての役割を果たしたはずだよ。

### ◆三一一

私がメグリヌリンメイと話す機会が持てたのは、完全なラツキーだった。

メグリヌは大量殺人鬼で、殺人兵器だった。

どのような嘘をもつてしても彼のしたことを真似できる人間はこの世の中に存在しないだろう。

そして彼自身がそれは出来ないと断言している。

殺人兵器でなくなつた彼を警察は捕まえた。

捕まえた当初は、自分で歩くことも出来ないような状態だったらしい。

そんなメグリヌはこのように延々と話すことが出来るところまで回復したらしい。

これは私が死んでしまう前の文章だ。

私は死んでしまった。

私は、影によって殺された。

私は発狂して、その発狂加減は、どのようなものだったのか、私自身わからないが、死んだ。

どうやら自殺だったらしいことはなんとなく自分でもわかった。

しかし死ぬことは怖くなかった、影に殺されてしまった私は、もう影におびえることもなく、このようにして経験をつむぐことが出来る。

どこにつむいでいるのか？

それよりも、私はメグリヌと言う男性と対峙し、彼が話し終わるのを待つたことがあった。

メグリヌの話の内容は冗長で、そして無意味だった。そんなメグリヌも、今回の一連の事件の被害者とも言えるのだろう。だが、彼は生きていて、彼が殺してしまった人はちはもう生きていらないということを考えるとメグリヌを糾弾せずにいられないだろう。彼が彼のことを自分ではないといくら主張したところで、その身体はメグリヌ以外の誰のものでもなく、その精神はやはりメグリヌ以外の何かが入る余地はないのだから。だから客観的に見て彼は完全な殺人者なのだ。まがうところなく、一寸の余地もなく、彼は犯罪者なのだ。

そして私も彼は犯罪者なのだと思う。

我思う ゆえに 我在り

だつたか？そんな言葉があつたと思うが、しかしそれを照らし合わせるとメグリヌは『我ではなかつた』もしくは『我ではない』とも取れる可能性がないわけではない。

私がメグリヌと話せたのはラッキーだったと書いたが、本当はそんなことはない。総合病院の込み合つた待合室で自分の名前が呼ばれるのを待つてゐる間、看護士たちが一枚のカルテをせわしなく取り合つてゐるのが見えた。ちらりと見えたそのクランケの名前が廻濡燐命であつた。

その難しい漢字を読み取るよりも病室名を盗み読むのは難しくなかつた。そのまま私は自分の名前が呼ばれるかも知れないタイミングを逸してでも廻濡燐命にあいたいと思つた。

そもそも一般病院にいるということを考えたこともなかつた。

なるほど、運命とはめぐり合わせだと、誰かが言つていた。  
死ぬ前の私はそんなふうにして気軽に待合室を出たのだ。

◆ 三一三

その男が行つた殺人はきわめてシンプルで、劇場型で非現実的だった。

とある殺人はナイフで、とある殺人は素手で、とある殺人はなんだかよくわからないもので。

確かに世の中には不思議としかいえないような『自殺認定体』や殺され方があるから、それらが特別不思議であるといふことはいえないと思われる。その上彼の殺人は基本的に情け容赦なく即死であることが多かつたから死体と言うにしては鮮やか過ぎたともいえる。

例えば、切れ味のめっぽう悪い刃渡り十センチにも満たない果物ナイフで首をはねることなんて無理なんじやないだろうか？後ろにあつた駅の金属製の柱も綺麗に真つ二つにして。

例えば、心臓を拳で一突きし、貫通させることなど人間には出来ないのでないだろうか？

例えば、一秒とかからず窒息死させることなど出来ないのでないだろうか？

例えば、その殺人すべてについて何十キロも離れた地点でほぼ同時に観測されることなんて、ありえなくないだろうか？

すべてに証拠が残っている。同一の人間がやつたという証拠が残っている。

そして最後はパトカーを楽しそうに持ち上げ、中に入った警察官とともに燃やし尽くし、指の先から火を出して、ガソリンに引火するだけでなく、自分自身の手を楽しそうに上げると巨大な火柱を出現させて周りの警官を焼き払った。

木々は消滅し、巻き込まれた人は悲鳴を上げる暇もなく消し飛んだ。

生き残った警官の話では、

「目を見たらいけないと思った。隣にいたやつが石のように硬くなつて居たんだ」などと言うインタビュー記事もあった。

真偽のほどはわからないが、彼・・・メグリヌの一連の行動で三十人の人間が死んだ。だが、負傷者はない。

すべてがそのようにして消えるか生きるかした。

消える、という言葉が正しいように私は思う。不謹慎なのは重々承知しているが、それでもそのような呼び方が正しいように思う。

私の所感ばかりを述べて申し訳ない。

メグリヌはそうして全く事件とは関係のなさそうな奈良の七草山で見つかった。

全国津々浦々で証拠を残しながらいろんな方法で人を殺した殺人機は、なぜか奈良公園で昼寝をするような形で見つかった。

もちろんただ事ではない。

『倒れている人がいる』と公園の管理人から通報があり、確認するとそこには世間を騒がしている、今もテレビに映っているメグリヌがそこにいた。

所轄から人員を集めてじりじりと包囲した。相手は何をしでかすかわからない殺人機械なのだ。注意する事にこした事はない。

しかしそのような期待とは裏腹にメグリヌは半死の状態で、そればかりでなく、被害者の全員の何らかの痕跡を体にしみこませた状態で見つかった。血やら髪の毛やら指紋やら、そういうものだ。

だが見つかるのが早すぎたと言わざる得ない。

奈良公園で見つかるほんの三十分前まで新宿公園で副都心をまるで笑うかのような残虐ショーを行っていたのだ。

その一時間前には九州で、その前には金沢で、その前では北海道で、大阪、神戸でも一人ずつ殺し、その被害は一週間ほど加速度的に広がったのだ。

だが、どういうことか、どれを調べてもメグリヌはアリバイが成立する。

『人間では絶対に移動できない』

ことと、

『人間では殺せないやり方を使っている』  
ことから、彼は人ならざるものではないかと言う憶測も飛んだ、だが、彼はどこから情報を取り入れても普通の一般民間人であり、健康診断を行った保健所から出てくる資料にも異常はなかった。

『自分は、つまり錯乱状態にあるから、精神的に責任を取れるところには居なかつた。だからメグリヌたる僕はここでこうやって一般の病院に居ることは出来るんだ、と教えてくれたよ』

もちろん病室から出ることは許されないのだけれども。  
ともメグリヌは付け加えた。

私はそれだけを聞きいくつかの質問をするとメグリヌの病室を出た。

「私は、乖離しようとしています」

と私が言うと、

「そんな匂いがするよ、でもね、病院じゃどうにもしてくれないよ」と、最後にメグリヌが言った。

ような気がした。

大空を舞つて、舞つているうちに、私は鳥になつて、意識は遠のいた。

サイキックになつたのは死んでからすぐのことだつた。

私の能力は念書。

忘れられた記憶、私のノートは電池の切れた彼の元に。

## 【4】 奇妙な出来事

### ◆ 四一一

メグリヌの名前は聞いたことがあった。

内容のあまりの非現実差に僕は、何度もその文章を読み直した。  
しかし書いてあることは同じだ。

そしてもちろんバッテリもない。

バッテリのない携帯ゲーム機は動かないはずなのだ。

だから僕はこの場にて現象の矛盾しているところを考えてみた。

・・・

あまりに頭が混乱していて、僕はうまくまとめることが出来ない。  
我を取り戻すのだ。

ひとつでいい、そう、ひとつで良い。

間違い探しですべてを見つけられるほどに洞察力は高くなかったはずだ。  
まずはひとつ。

ひとつ、バッテリがないのにゲーム機が動いていること。  
そうだ。その調子だ。

ひとつ、画面表示にバッテリマークが消えていること。

ひとつ、バッテリマークの横についているはずの電波マークがないこと。  
電波がないということは、メールも届かない。  
当たり前だ。当たり前すぎる。

当たり前なこと?

理李、君は自殺なんかしたのか?

君は風の強い日に飛ばされたのか?

君はもともとサイキック力だつたじやないか。

君はいつも僕と一緒にたたじやないか。

君は僕の事をソウジ君なんて呼ばない。

このメールは嘘だらけだ。  
理李からのメールではない。

ここに理李は居ない。

確かに僕の名前は書いている。しかし、そんなもののゲーム機のプロフィールからとつてくれればいいだけのこと。

こんなことをしたのはいったい誰だ。何のためにこんな事をしようとする。自分のこともサイキッカだと書いているから、メール事故のようなものなのか？それにしてはあまりにも内容が個人に特定されすぎている。殆どは主人公の主観的な物語だが、第三者的視点に僕のことを知らないとかけないことも書いている。

これはあまりにもおかしなことだ。

サイキッカとなつた理李は、この死んだ後にサイキッカになつた誰かに情報をリーグしたのか？

しかし、それにしてはあまりにも情報が少なすぎる。リーグしたにしては情報が陳腐だ。

思考するにしては僕の頭はあまりにぼうとしていて夢見心地から抜け出せていない。ゲームのやりすぎか、もしくは人とのコミュニケーションが圧倒的に不足している事が関係しているのか？

もしくはここに、考える役の理李が横に居たとしたら僕の環境はもう少しよいものだつたように思う。

彼女は僕が悩むと常に助け舟を出してくれた。

多分そうだ。そんな役回りを僕は彼女に与えてしまっていた。

だからといって彼女はその補助的な力を出すために、自分から田代めたとでも言うのだろうか？

僕のために？

僕だけのために？

馬鹿らしい、と僕はその考え方を一蹴した。

冷静になるんだ。冷静になればもう少しまともな結論にたどり着ける筈なんだ。

…いや、もう少し」の熱に浸かっていよう。

もしかすると僕がこの次に「こんなふうに思考するタイミングは死ぬまでないかもしない。

何も考えないままに死ぬぐらいなら、誰かのわなかもしれない」このメールに乗つてみ

たほうがきつといい。

僕には生きる意志なんでもうとつぐの昔になくなってしまったのだし、これはいい機会なのだ。

僕はもう一度その携帯ゲーム機の画面を覗き込むと、その長い文章の末尾には未だ続きがあるようになにスクロールバーが示していた。

スクロールした先には真っ白な空間があつて、僕に十字キーの下を押させ続けた。じつくりと進む画面を見ていると、スクロールバーがこれ以上下がないことを示した。

### 『アマツチのところに行け』

画面に写された文字。

#### ◆ 四一一

ピリリリリリ。

電話が鳴るなんて事は仕事のとき以外滅多にない。それも家で仕事をしているときに限つて、だ。

基本的にはカスタムマナーモードを使つてるので、外出先で電話が鳴ることは非常に稀だ。

だから最初それは僕の携帯が鳴っていると思わなかつたが、携帯電話の音が近くも遠くもならないことを考へると非常に不思議な現象だと思った。

僕は街の中でとまつていて、僕の前を人がどんどん歩いて過ぎてゆく。僕と同じ場所にとどまっている人は居ない。

そして僕は新村からの電話を待つていて、彼からの着信はバイブレーションだったはずだ。

しかし5回田の「一」で僕は携帯電話の着信表示を確かめてみた。

僕の電話が鳴つていた。

「もしもし、アマツチです」

街の雑踏の中で僕の声はその雑踏というノイズに混じつて聞き取りづらい。だから出来る限りはつきりとした声で対応をするようにしている。

『お久しぶりです、こんにちは叔父さん』

受話器の声が僕のことをおじさんという。

「誰だつけ？」

『甥の宗治です』

「ああ、久しぶりだね」

と僕は言った。

「誰だ？その声は澄んでいて十代のように聞こえる。僕に十代の知り合いは居ないはずだ。いや、大学のゼミ生の中にはいるのか？しかし僕の甥が同じ大学にいるという事は聞いた事がない。

『電話したことなかつたから驚いたと思つんです。』めんなさい、番号は母から聞きました』

思い出した。年の随分違う姉の子供か。

「少年、もしかすると君は僕のイラストレーションのファンかもしけないが、その相手をしている暇は・・・」

『え、おじさんはイラストレーターなの？いや、興味はあるけどおじさんの絵だと思って、アニメやそういうものには触れていないからわからないんですけど・・・そういうことで電話したんじゃないんです、スマセン』

どうやら僕はちんぷんかんぷんな事を言つてしまつたようだ。僕は少し自分が恥ずかしくなつた。

『そりながら、それにしても今はあまりベストなタイミングじゃないんだ、仕事の電話も待つていいし、それに・・・』

僕は今時分が置かれている状況についてうまく説明できる自信がなかつたが、なんとかこの少年に対して素直で居るべきではないだろうか？と、僕は思った。上手く説明する必要はない。もし上手く説明するほど深く事情が込み入っているのであれば、それはそれでひとつ、街の隙間に挟まつて自分の自分を抜け出すのによい道具になるだろう。

『君のおじさんは今、新宿の片隅で電柱に挟まつていて動けないんだ』

と僕は言った。

なんだ、新村にあんなに説明しなければいけなかつたことは、現象だけを説明するとこんなに端的なことだったのか。

『なるほど、わかりました』

わかつた？何が？

『おじさんに相談したいことがあるんです』

「何がわかつたんだ？」

『それを含めて叔父さんに相談したいことがあるんです』

『母ではダメで、僕には友達という友達はこないだ死んだばかりです』

『それでは僕では少し役に立てそうにもないね』

と僕は言った。これ以上の面倒は面倒くさい。

「僕は、僕自身のことで頭がいっぱいなんだ」

話したこともない少年に、甥っ子に対してもいぶん僕は冷たいことを言つのだな、と内心考えた。

『それならちようどいいです、僕はおじさんの知らないことを知つているとおもう。おじさんの助けに僕はなれるかも知れない』

「・・・僕の知らないこと?」

『そうです』

僕の声はひどく卑屈に聞こえたことだろう。

『なのでおじさんのところに今から行きたいと思うんです』

『今からは無理だ。仕事があるし、それに僕は家には帰れない』

『それはどうしたんです?』

『それは、さつきよりも短いがよくわからない』

僕は溜め息のように少年に向かって、いや受話器のマイクに向かってぶつぶつとつぶやいた。

「僕は今影に追われている、それは勘違いかもしれないけれども、それは家にいる。僕の影だ。影が僕の家を巣にしてじつと僕を食べるのを待っているんだ、だから僕は結構今怖くて、家に帰ることが出来ない」

と言つた。そして続けて、友人の新村という男の家で作業をすること、その作業が多いことを少年に告げた。

『ありがとうございます、なるほど・・・邪魔しないようにしますので、新村さんの家にお邪魔してはいけませんか?』

『いつもなら良いと言つかもしれない、でも僕にも状況がある、これ以上の面倒を抱え込むことは今の僕には多分許されない』

『でも、おじさんにはその面倒を片付けることが出来ない。僕も自分の面倒を自分で解決できることが出来ない』

「そんなラノベみたいな口上を述べたところでぼくは何も出来ないよ」  
随分僕の声は平坦だつただろう。

「そもそも、」

と僕は話を始めた、

「君はなぜ僕を選んだ。何で僕でなくてはいけないんだ」

『それは、メールにそうしろと書いてあつたから』

少年の声に僕はぞつとした。それは僕の平坦だと思っていた言葉の温度よりもずっと寒くて、機械的だったからだ。

「メール?」

と、かろうじて僕は少年に問い合わせることが出来た。

『その辺の詳しい経緯もすべて会ってお話ししたいのです』

と少年は改まった口調で言う。

僕はしばらく考えた。新村への言い訳や、プライバシーの侵害などについて。「わかった」

と僕はいつて待ち合わせ場所を新村のアパートの最寄り駅に設定した。

『わがままを言ってすいません』

と少年は言つて電話を切つた。

電話を切るとすぐ新村からの着信があつた。

「あー、一人少年が来ることになった、僕の甥っ子らしい」「なんだそれ、という声が聞こえたが、溜め息とともに別に構わないという答えが返ってきた。

全く、持つべきものは友達だな、と僕は思った。

そして恐るべき柔軟性。

そのとき随分僕は影に対して警戒を緩めていて、もしかするとその時には既に影についてあまり恐怖を感じなくなっていたのかもしれない。

『まあ、お前も俺も、随分溜め息で会話するようになつたものだ』と新村が言つた。

「全く」

『やれやれだよ』

やれやれだね。と、僕は心中で思つて、通話を終了した。

ピツ、つという電子音が僕の耳を貫いた。

件名：作戦会議やるからお前も来いよ 本文：追われているやつが増えたんだ。最寄

り駅は駒込で、巣鴨寄りの改札。<sup>t</sup>

それに時間とお菓子の上限金額を書いてメールを送信した。

死なばもろとも、悩める子羊は一度に解消。

#### ◆ 四一三

母から叔父さんの電話番号を聞けたのはラッキーだった。

そこしかつながりがなかつたというのもあるけれども、結果はオーライだ。

僕は未だ彼女の顔を思い出せない。

「このまま彼女の顔を思い出さないのかもしない。」

触れた唇の暖かさも、彼女を抱きしめたときのぬくもりも、遠い昔の記憶のような何かになってしまっていて、ぜんぜんリアルじやない。

ゲーム機の中の女の子が話す、本の中の人間が関係を築いて行く過程で得る感覚を、僕は頭の中で空想しているだけなんじやないだろうか？ 本当はそんなこと一度も何も彼女とは関係なくて、その手のぬくもりだと思つていたものは、本当は冷たかったんじゃないだろうか？ 僕の記憶は何者かによつて改ざんされ、彼女などというものはそもそもいなかつたのではないだろうか？

理李、僕が君を守ろうと思ったことはなかつたかもしけないけれども、僕がこんなふうにして君と離れ離れになるとは思わなかつた。

そう、僕たちは離れることはあつても、それが最後と思うことなんかなかつた。どんなに離れていて、どんなに時間が空いてしまつても僕と理李はまたいつか再会できることがあると思っていた。

空の上ではなく、また空から降りてきたカメラの視点みたいに僕と彼女は今度は一緒に写つている。

ハッピーハンドのように。二人がどんな顔をしているのかはわからないけれども。

などと耽つっていたのは叔父さんの待ち合わせ場所に着くまでにすることがなかつたらだ。

久しぶりに乗る電車、久しぶりの雜踏。

僕の故郷はこんなにもうるさく、こんなにも知らない人であふれているのだ。

脳内で再生されるのはよくミュージックビデオの演出で、映画のカットで見かける光景だ。僕を中心としてカメラが引いていく、僕はすぐに見えなくなつて、空の、雲の中に視点は移動する。

平日のお昼の山手線はすいていて、僕はガタンゴトンと揺れる感覚を心地よく思つていた。

僕は耳につけたイヤホンをはずして、そんな電車のノイズ、笑い声、話す声、マイクアナウンス・・・すべての意識が分散して、それぞれに小さく付着していくようだつた。

片方のイヤホンからは少し前に流行つたボップミュージックはトントンとリズムを刻みながら体へと流れ込んでくる。

家にいるときには感じなかつた高揚感がある。  
不謹慎かもしねれない。

それでもドキドキとしていた気持ちを自分自身に對して隠すべきではないと思つた。何らかの解答がきっと待つてゐる。

正直な話をすると、僕は知らない人と会うのが苦手だ。

入学式も、友達の紹介も、すべて緊張する。だから大抵は理李についてきてもらう。小さいころから一緒で、理李と出会つたのがいつだったのか、僕には思い出せないから、もうずっと二人で一人のような勘違いをしていたのだろう。

僕は、容姿端麗というわけではなけれども、小柄で小さく、細く、顔が小さいとよく言われた。かわいいと形容されることもあつたが、そういうのは苦手だ。

理李は僕とあらゆる意味でよく似ていた。線が細く、色が白く、僕が言うのも変だが確かに綺麗な子だったはずだ。顔は思い出せないけれども、清潔感がある感じで、人にとてもよい印象を抱かせる、そんな女の子だった。

僕が居たせいかもしれないけれども、あまり活動的だったとは思えない。

何人かのラブレターを僕はもらい、理李も同じように誰かからの好意を受け取つた。僕たちは付き合つているわけではなかつたから、普通にほかの人に対して恋をしたりもした。

：まあ、それが本当に恋と呼んでよいものなのか、僕は判断できないのだけれども。其れにしては随分お気軽な思いだったように記憶している。

「好きです」「じゃあ手をつないで、キスでもしましょうか」

だけど、それらはもちろんうまく実らせることができなかつた。

僕たちは、少なくとも理李が居たころまではほとんどのすべてを理李に話し、そして理李は僕に話してくれた。

でも、結局のところ僕が叔父さんのところに行くのは理李のためではなく、理李も僕がそのように思つてないだらうということはわかつた。

おじさんと僕は面識がない。少なくとも僕にはない。そしてさつきの電話の口調からしておじさんにもない。

アマツチという苗字を持っている僕の知り合いは、なんとなく印象深い響きだと思つた幼少期の僕の体験がヒントになつた。

公園から帰つたあの日、僕は携帯ゲーム機を充電器にさした。

充電が始まること、僕は母に『アマツチって母さんの旧姓だつけ?』と聞いた。母は少し困つた顔をしながら、

「違うわ、私の弟の苗字よ」と答えた。

だから僕は今から知らない人に会いに行く。理李が居ないのに、僕一人で。だけど、思ったよりも緊張なんかはしない。小遣いはもらつていなかつたが、ゲームばかりしているおかげで広告収入とRMTで得た小額の金が銀行口座に入つていた。マシン、ゲーム機、ソフトを買うのに使つていたが、今では全く食指が動かない状態だったこともあって、自由に外で行動できるぐらいの金があった。

理李と行つっていたキャラを残して装備もアクセサリもアイテムも、すべてRMTで現金に換えた。

振り込まれた額をみて、僕はこんなにも少ない金額のために理李との時間を使つていたのか、という小さな驚きも一緒に受けた。

人生とは、多分、僕が想像しているモノとはまったく違い、僕らには無関心で、つらいものなのだろう。

『駒込、駒込でございます。東京メトロ南北線はお乗換えです。』

車内アナウンスがあつた。

なるほど、こうして思考とは中断されるものなのだな。  
僕は電車を降りて、階段を上り、改札を出た。

【5】 人見知りと少年少女と、それを助けようとする」と

## ◆ 五一

新村の家に着いたときに、僕は新村の周到さに舌を巻くことになるのだが、僕はそのときは未だ何も知らない。

ぴつたりと体をコンクリートの電柱にくつつけた背中がびりびりと痛かった。  
何時間かの精神的な葛藤を過ごした後の肉体的な疲労はどうしてもうまくやり過ごすことは出来ないようだった。

僕が目覚めると、基本的には影は何もしてこない。

おかしなメール、新村からの催促、そしてあつたことも無いような甥からの電話。  
僕のうんざりは影どころの騒ぎではなくなったことで、影の呪縛から抜け出すことが出来た。

僕がサイキッカであること、世の中で今はやっているらしい発狂事件とは何か因果関係はあるのだろうか？

ふとそんなことを考えた。今まで考えもしなかったことだが、それは近からずとも遠からずなのではないだろうか？と考えた。

廻濡燐命といったか、テレビで見たのか中吊りで見たのか忘れたが、あの男、どう考えても正気ではなかつた。そしてあまりにも常軌を逸しすぎている。サイキッカだったとしても力が強すぎるし、そんな人間は人類史上現れたことがない。

もしくは僕、もしくはそれ以上のサイキッカは完全に情報を隠蔽されているのか？  
ただ、あの惨劇をテレビでもネットでも、どこでも見るようになってから僕は少しずつその関連性について全くの否定が出来なくなってしまったのではないだろうかと思うようになった。

自分も同じように人を殺す事になるのか？

自問するが答えはない。

あの色白で細い優男が腕一本で人の首を引きちぎることなど出来るのだろうか？  
同じ事が僕にもできるのか？

嫌、僕の力ではムリだ。

いやいや、やめよう。想像するだけで悪寒がする。

廻濡について考えるのはやめたほうがいい。

そもそもサイキッカなどというものは、いまだ完全には解明されていないし、存在さ

えも認められたといいがたい。

僕の存在だって僕自身が宙ぶらりんにして、保留した事に決めたばかり。そういう風にしようと決めたのはそんなに遠くない昔の自分。

でも強い弱いに関係なくサイキック力の実態数は確率で言えば同じ高校に三人居るかどうかというところだろう。

そういうえば、新村のやつも最初あつたときはその一人だと思ったが、彼にはその才能はないらしい。

そう言えば最近見なくなつたが、サイキック力をサイキック力だとわかるという人物がテレビで大々的に取り上げられていたが、あいつはどこにいつてしまつたのだろう？本当にそんなことが出来たのだろうか？

僕を見て、彼はなんと言つだらう。

僕は痛む背中をさすりながら改札を抜け、山手線のホームへ歩いた。

『君のその仕事はとても危険だよ』

誰かが僕につぶやいた。

聞き間違いでなければ僕につぶやいた。

一瞬の間を置いて思わずその場に立ち止まり、周りを見渡したが、僕のことを興味の対象と思っているような人間はどうやらいないようだった。いや、居たとしても僕にはその力はない。

殺氣やそういう類の気配もない。

勘違いだったのだろうか？

違う。

あれは僕に対して言つていた。

新村に相談するべきだろう。だが、これから僕は新村の家に行く、そのときに話せばいい。仕事が立て込んでいるのであればそれが終わつたらでいい。

僕はその場でのことをいつたん保留にして階段を上つた。

しかし、と僕はもう一度思うのだ。

彼女が居れば僕は彼女にこのことを話しただらうか？  
恋人だった時代、友達だった時代。

なぜ新村には話せて彼女には話せないのか。

そう自分に問いかけると自分は答えた。

『彼女には言う必要がなかつたじゃないか』

そうだ、と僕はつぶやいた。

彼女もサイキッカのようなものだつた。居なくなつてしまつた彼女は、その、の、様なものだつたといふにふさわしい人物だつた。

相手の考えていることがわかるという能力だつたが、単に鋭い洞察力を持つてゐるだけではないか？と僕は疑つていた。

そしてそれは彼女も同じように考えていたらしく、自分のことに対するサイキッカと呼ばれるのを嫌がつた。

だからといって言葉を発さないのかといえばそうではなく、むしろ彼女とはよく話した。

僕の言葉はきれぎれで、繋げる事に苦労するだらうが、彼女はそんなことはお構いなしに僕の言いたいことをくみ上げ、全く問題がないといった風情で話を続け、根気よく相槌をうつた。

時には僕の思考を先回りして話していたような感もある。

確かにそういう時はサイキッカの片鱗を見たような気がするが‥‥。

彼女は言った。

「やめてよ、そんな呼称はやめて私は多分、きっとそういうじゃないと思うし、もしそうだつたとしてもたいしたものは何も持つてない、貴方だって嫌がるじゃない、貴方はすごいのに」

僕は手で静止して彼女のそれ以上の言葉を取り上げた。

僕だって自分の事をサイキッカと呼ばれるのを嫌がつてゐるじゃないか。

## ◆ 五一一

結局私は今このようにして、よくわからない人の家に居るのだけれども、私の混乱よりも、私を呼んでくれたこの人たちの混乱のほうには圧倒されてしまった。

一人はすべてを遮断するようにしてゲーム機と向かい合つていて、一人はずつと電話をしている。申し訳ありませんとか、もう少しあ待ちくださいとか、そんなことだ。

そしてもう一人完全にサイキッカだつた。

私はそんなふうにして堂々と人前で能力を使う人を見たことがなかつた。

PCを三台使つていた。彼はPCをいじらない。この状況を説明するには余白が少な

すぎる。などとフェルマーの有名な台詞を「」でつぶやいてみたところで特に意味がない。何とか状況を説明してみようと思う。

彼は線画を書く、線画が終わると、それは彼の手元から離れて、その原画はふわりと浮く。次にスキヤナにかけられるが、そこに人の力は関わらない。PCが動的に線画を取り込むと、今度は無人のタブレットペンが紙のデータを線画に書き起こす。そのときどんな処理がなされているのか、自立的に動いているのかそれとも過去のデータから何かを予測しているのか、とにかく結果としては底に一つの仕事ができあがっている。一台の小さなモニターからはログがどんどん吐き出される。彼は原画を書いているから、どんどん線画はたまつていく。彼の周りには碁石の一回り小さいものがいくつか浮かんでいて、それがキーボードをたたき、PCをオペレートする。

線画はコンピュータによって、大味に着彩される。何枚かたまつたら、下書きをスキヤナに自分で入れて、仕上げの作業に入る。

着彩されたデータは共有ハードディスクで管理されているらしく、違うPCの前に座つてどんどんと仕上げをしていく。大体十分間で一枚程度のイラストが完成品とされているのだろうか。

明らかなチート行為がそこでは為されていた。当たり前で、それが当然と言った風情だ。

『夜中までは仕事が続くから、話はその後で』  
と最初にその新村と名乗った男は言った。

でも、と男は付け加えた。

『お茶だとか、必要なモノがあつたら言つてくれ、金がないなら俺が買いに行くし、もしひ買われて不味いモノがあるなら、俺が買いに行こう。この中で面が割れていらないのは殆ど俺だけだと言うことになるのだろうし』

まるで影を怖がっているように思えない。

私が女だということにも、私の年齢が条例に引っかかるということも、全く気にしていないみたいだった。

待ち合わせの場所にはもう一人男の子が居た。

サイキッカ、不思議な能力を持つ人すべてに対する世界からの呼称。

その力はすべて同じではなく、その力を持つ人自身がそんなには多くない。

自分がそうであっても気が付かない人も相当数居るらしい。

つまるところ、基本的なサイキッカは、漠然としたものであって、自慢できるような能力ではない。些細な能力なのだ、たいていの力はあってもなくても世界は変わらない。制限された力。

未来もサイキッカ。

予知能力といつても嫌な感じがするとか、テレパシーといつても、ターゲットを絞れない、しかもメッセージではなく感覚的に鳥肌を出させる、というようなんぐらいの能力が一般的だ。

未来の持っていた能力はかなり強力だったと思うが、この日の日の前で行われているその能力はそんなものでは済まされない。

そもそもどこまでが能力でどこからがコンピューターで、どこまでが人間の基本的な能力で行われているのかわからない。

そんな状態ははじめてみた。

サイキッカは、随分昔から居たらしいと言われている。人類史以来、様々な形で記録に残っていることからもその力は『科学的』ではないにせよ認知されている。

ただ、やはり胡散臭いと言う意見が一般的であり、それはサイキッカが嫌われたというよりも、その力を実用的に転用できるほどのものではなかつたからだ。……と私は思つてゐる。

だからこそ、目の前の異常さは異常としか言いようがなく、それ以外の説明が出来ない。

能力を実用的に使える人間が居る。

そのことがあまりの驚きに満ちている。普通すぎて私は言葉を失つてゐる。

「ふう、・・・君、名前は？」

と、そのサイキッカの友人である新村が私に聞いてきた。

「沙希です、結城沙希」

私は答えた。

電話は終わつたのだろう、そういうえさつきから声が聞こえなかつた。

「沙希ちゃんか、あー・・・」の日の前の光景は忘れてくれよ、たぶん仕方がなかつたんだと思う

「え？ あ、ええ、すぐに、例えば明日には忘れられそうにはないですけれども」

といつて私は苦笑いをした。

石が意思を持つたようにキーボードをたたき続けている。

「いろいろあってさ、明日締め切りなんだ」

と、説明ともいいわけともどちらでもないとも取れるような」とを新村さんが言った。

「はあ」

と私は相槌を打つことしか出来なかつた。

「そのうち終わるから、・・・暇だつたら雑誌とか本とかあるから適当に読んでてよ」

「あの、私のこととか聞かなくて大丈夫ですか？」

と、私は思わず聞いた。

「ああー、いいよ、あいつが終わらないとまともに話が出来ないでしょ。あと二時間ぐらいだと思うからそれから話を聞こう」

と、言つたあとで新村さんが私を見て目を細めた。

「二時間経つと条例違反の時間になっちゃうな、いいの？ 家族とか」と、新村さんは私に聞いた。

「大丈夫です、きちんとメールはしておきました」

「うそつきな？」

「そうですね、嘘になっちゃうかもせんけど、私は私で最近少し変なところがあるから、両親もそこら辺は汲んでくれているみたいで、ありがたいことです」と、私は言つた。

新村さんは目を細めた後、

「なるほど、わかるよ」

とだけ言つた。

私は目の前の人間離れした能力に見とれていて、詰まれた雑誌を手にとつてもいまいち読み進める気にならなかつた。

「あ、二時間じゃムリだな、この分量」と新村さんの声が聞こえた。

少年は、なぜこのような異常な空間に居ながらああも淡々とゲームに向かい合つていることが出来るのだろうか。

### ◆ 五—三

「先生の気が変わったんだ」

と俺は、変人である友人に電話をかけていた。

そしてその友人は仕事仲間でもつた。

田の前のパソコンには、【大至急】とタイトルの前に装飾されたメールで、メールのリストはいっぱいになつていた。

「まさかの外部主人公の起用」

と俺が言うと、

「こまつたな」

とアマツチが言つた。

困っているのは俺も同じなんだよ、まあ、描くのはお前だから、これから大変なのはお前かもしれないけど、「こつちはこつちで事務処理代わりと大変なんだ。と、心の中で呟くが声には出さない。

一言二言話したところで、俺は早急なる合流と、帰宅を命じた。

だが、「家には帰れるんだが帰れないんだ」と、わけのわからないことを囁いてきた。アマツチのやつ、マジでだんだんおかしくなるな・・・いや、むしろこつちが本物ってわけか? ゼンゼンわからんが、とにかく・・・。

そう、とにかくそんなところで、躊躇している暇はない。

「わかった、とりあえずお前が分けわかんないのは今に始まったことじゃないしな、お前の環境ごと全部うちに運んでしまうぞ」

と言った。

前にも同じようなことがあった。そのときよりも随分機材は増えているのだろうが、メインの環境だけ運び出せばいい。

「鍵は変わっていないな?」

と俺が尋ねる。

「変わってない…はずだ」

とアマツチが言った。

自分の事も今イチ覚えていないのかよ。と内心で少しだけ毒づいたが、面白いやつだと笑った事も確かだ。

アマツチが、悪いな、といつよくなことを囁うと、待ち合わせの時間を決めて、電話が切れた。

基本的には約束を守るやつだから、時間には来るだろう。

もちろんそのときにはまさかおまけが二人も付いてくるなんて思いもしなかつたわけだが。

俺は家の来客用のスペースを簡単に片付け、自分の環境の半分を移設した。  
扉に鍵を閉め、愛車のジェミニ(二十年落ちのJT191)のドアをあけると、勢いよくドライバーシートに身をうずめた。

キイを差し込んでエンジンを始動させる。特にこれと囁いた特徴的な音はない。ターボがかかると独特的の機械音がするが、それぐらいだ。

あえてあげるのであれば1・6リットルのエンジンなのに恐ろしく燃費が悪い。

愛車に乗って、アマツチの家に向かう。アマツチの家まで片道にかかる時間は車で十

五分。環境を切り離して車に積み込むのを二十分としても、家に運び込んで環境構築までが四十分ほどしかない。

待ち合わせを三時間後にすればよかつた。と少し後悔したが、今更変更できない。

もちろんメールで『一時間遅れる』と書くのは簡単だが、せっかく眠れる獅子を起したところだ、また眠られてはたまたものではない。

自分がちょっとどこで気張る以外に最良の選択肢を見つける事が出来ない。

そうこうしているうちにアマツチの家に着く。もうひとつ先の角を曲がれば、すぐそこのアパートだ。俺はワインカーで右折指示をする。

そして通りを曲がったところで、俺はアマツチの影云々がなんであるかを知った。

「なるほどね」

と思わず息を呑んだ。台詞は強がりだ。

そこに広がっていたのは、大量の猫の死骸。

いつたい何匹の猫の死体がそこにあるのか見当も付かない。

あいつがやつたのか？それとも誰かがやつたのか？

しかし今の俺にその光景について冷静に分析している暇はない。  
つまるところ、結局これは幻覚の一部であって、しかも正常な人間の見る光の幻。  
だから臭氣などはない。圧倒的な気持悪ささえ克服すればたいした事ではない。  
だからといってその光景は異様すぎる、見るに堪えないし、気分も悪くなる。臭氣だけが不快にさせる要因ではないのだ。

湧き上がる吐き気を少しの気力で押さえつけ、俺は車の扉を開け、アマツチの家のアパートの駐車場に降りた。

さっきまであった猫の死骸は歩くたびに消えてゆく。いや、歩くところだけ消えている。

幻覚なのだ。

アパートの鍵を開け、中に入ると1LDKの室内は光で満ちていた。  
いつもどおり、そこは神々しい粒子が集まる場所だった。

しかしつもよりも随分その光の粒子の量が多いような感じを受ける。

「さて、さっさと作業するぜ」

と、自分に言い聞かせた、外の地獄と、室内の天国を何往復かするのかと考えるだけで憂鬱な気分になつた。だがそれはしなければならないことで、自分以外の誰にも出来ない仕事なのだ。

わかっている。

「わかつてゐる、アマツチの不可思議さはそのまともとの上に成り立つてゐるのだろう?」

俺はペンをひとつ取り上げると、用意したケースの中にそれら一式を納めた。

その後、PCのモニタと電源を切り離し、モニタはパネルだけを取り外して専用の持ち運びケースに入れる。本体は後で抱えて運ぶことにする。モニターームは自宅のスペアをつかえば済むだろう。

俺の周りにはまるで俺が邪魔であるかのように光が集まつてくる。  
俺は何度もその光に惑わされ、気絶しそうになつたが、そのたびに自分の頬を叩いて正気を取り戻させた。

ケーブル類は自分の家にあるモノで代用できそつたから周辺機器をまとめてしまふと、アマツチのデスクからは殆どのモノが消えた。

素描用のクロッキー帳を俺は何冊か持つてきたフォルダに詰めると、その全てを玄関の手前に置いた。

玄関から先はまた猫の死骸の幻覚がある。

地獄と天国、コレを作つてゐるのはアマツチなのか？それともコレもあいつが巻き込まれている何かの一つでしかないのか？あいつはただの絵描きで、俺は出版社と折衝するだけの仲介者でしかない。それ以上に友達であり、そしてそう言う意味では全く俺になんの能力がないとしても、あいつは同類なのだ。俺の知つてゐる限り、アマツチはこんな悪趣味は持つていない。

と、信じてゐる。

何度かの吐き氣とともに俺は自分の車に荷物を詰め込むと急いでクルマを発進させた。  
いくら俺でもそんな非現実な場所に延々と留まりたいという気はない。

そもそも五分のビハインドだ。

僕の指にはアマツチの部屋の光がまだ付着してゐるように錯覚する。その光は、体から離れるときにどうしようもない虚無感を植え付けるモノなのだ。

どこまでが本当で、どこからが非現実なのか、俺は今は分からぬ。

アマツチと会うまでにもずっとそれは同じように分からなかつた。そしてずっと友達という友達が俺には居なかつた。

もしかすると友達が出来れば、世界は何か変わるのだろうと思つていた、特に良い方に、自分を肯定する方向に、回るものだと達観していた。

だが、実際には違う。誰がこんな運命を僕に与えたのか分からぬけれど、僕は今非常に困つた立場について、友達が出来たことで、悩み事は二倍にも三倍にもなつた。

そもそもアマツチに会わなければこんな吐き氣をおぼえる必要はなかつた。

かといつて全ての元凶がアマツチにあって、俺はあいつからマイナスの要素しかもらつていなかつたと聞かれればそれは全力で否定する。

俺が孤独だつたよりもその何倍もあいつは孤独だつた。

人が普通に見えるモノが見えず、感覚だけで生きていることを誰にも話さなかつた。あいつのことを、同級生はまるで教科書ですり込まれたように同じ視線を向けていたのだろう。異端児は全ての対象になる。いじめでも、畏敬でも、崇拜でも、でもアマツチはそんな対象ではない。ただの凡人に、おかしな力がくつづいているだけだと、俺は思つてゐる。

そんな風に思いながらクルマを自宅へと運転していた。

幻覚がエスカレートしたという印象はない。

ただし、あえて注釈を付けるなら、アマツチの居るところにはより多く幻覚が出現していると言つことは外せない。

あいつが元凶と叫ぶよりも、どちらかと言えば何かの触媒になつてゐるような感じを受ける。

自宅について、アマツチの環境をセットアップする。

俺の家とアマツチの家は恐ろしく同じに見える。

アマツチがそう望んだわけでもない。俺がアマツチの環境をうらやましがつた結果、机をくれたのだ。その次の週は本棚。といった感じで家具を買つてくれた。

そして部屋に置いてみると、殆どレイアウトが変わらなくなつた。

一体、アマツチは俺に何を期待しているのか分からぬが……。

そして今アマツチの機材を置くと、本当にそこはアマツチの家のようになつた。最も、おれの部屋はリビングの他に部屋の洋室とダイニングキッチンがあるのだ。だからそもそも部屋のレイアウトは異なる。

そして、この部屋には、あの部屋のような天国のような光は満ちていない。

あの光について、一度だけアマツチに尋ねたことがあつたか。

「これは、何だ?」

「なんの話?」

「光だよ、部屋の中に溢れているだろ? ロレはどんな仕掛けがあるんだ? 何か特別な光源を使つてゐるとか、それともこの部屋は日が当たると特別こんな風になるように作られているとか……」

「光?」

アマツチは口をぽかんと開けて、俺に聞いた。

「そうだよ、光だよ」

俺が言うと、

「分からんな、そんなモノがあるのか？」

と言つた。

「何だ、知らないのか」

アマツチは腕を組んで、うなつた。

「例えば」の辺とかにもあつたりするのかな？」

といって、組んだ腕をほどき、空中の光が貯まっているところの辺りをしたからなぞる  
ようにして見せた。

「そうだよ、その辺にも光がある、見えてるんじゃないのか？」

「いや、何も見えないな、何か、だけどこいら辺は不思議なイメージなんだ」

とアマツチが言つた。

俺はそれ以上の言及をやめた。

そんなことをしたところで無駄なのだ。

見えるモノは見える。

見えないモノは見えない。

## 【6】世界についての概要

評論家の見解によると、この世界はいくつかの時間軸が重なり合って歪みの中で不安定な状態が続いているんだと言う。

例えば、超常現象であつたり、世の中の不可思議なこと、無いはずのモノがあつたりする幻覚、今は未だ解明されていない」とも多いけれど、同じような力が干渉することで起こる。

よく観測される幻覚としては逃げ水のような蜃気楼現象や陽炎のような光学的な現象がそれに当てはまる。

また、ジャンルは少し違うが、ラップ音や、幻覚、幻聴もコレに起因されることが多いと言つことだ。

連日のテレビやラジオ、インターネットや雑誌…メディアと一緒にしてもいいが、では様々な議論が為されているが、それらの中でコレだ！と言う決定的な答えが見つかることはまず無い。と、いうかメディアでやっていることで本当のことなどあるのだろうか？全ての事柄に対し謝罪会見を開いているイメージしかない。マスメディアといふのは本当に信用しても良いものなのだろうか？そして、その上で流れている情報も、巧妙に歪ませた嘘なのではないか？

などと考えさせるのは、特に僕が特別懷疑的なのではないと言つ前提があつてこそ成り立つことなのだろうが、僕にその証拠を提示するだけの能力はない。

僕のことを人は、監視者と呼ぶ。

それはあまり的を得た呼び方でないと僕には出来る。

僕は傍観者で在るが故に様々なことに対する常に客観的であつたし、そのつもりでいた。

僕が表に出ることはまず想像できない、頭の片隅で自分という意識が埋もれていることも別に苦痛ではなかった。

しかし、僕の宿主が僕の存在に無意識下で気付いてしまったのだから、それは抹消するしかない。

僕という存在は、その狭間のような所から、何かの行き違いになつたところから生まれた何かなのではないだろうかと予測している。僕自身も僕がなものであるのかは今イチよく把握できない。

だけど、僕は普段の人間のコミュニケーションを取らない代わりに、僕と同じような

無意識以下の意識とリンクすること、宿主の視覚、聴覚その他から入ってくる情報についてシェアしていく、外界のことを知る事が出来る。

僕たちのような存在のことを世間一般では全く気にとめられることがない。

それはまず自分たちのような存在が、外に漏れると困るので、外に漏れそうになつたときにはそれを何としても止めようとする力が働く事から来るらしい。

コレは僕の意志なのかもしれないし、リンクしている自分たちという無意識の固まりの相違なのかもしないが、詳しいことはよく分からない。

僕たち…、と言う呼び方は自分たちには似合わない。

グループ、チーム、どれもしつくりと来るモノがない。

…ライブラリ、あえて言うならそなうだらう。

次元というモノも存在しない、意識だけの結束、何となくそこにあるという集団意識。クラスターという言葉には、偶然という言葉がそこまで的外れでないように感じる事にも関係しているのだろうか？

しかし自分たちの事をクラスターと呼ぶのでは話しずらい。  
語弊があるかもしだれないが、僕、もしくは僕たちという呼称を使わせてもらう事にする。

僕たち観測者に課せられた使命は特にない。

ただ、この、僕の宿主や、それと同じモノが世界と呼ぶモノに対しての強大な敵が現れたときに自分たちが何らかの方法を使って排除することが目的と言えば目的なのかもしない。

存在意義…そんな大したものではない。

ただ、無為に時間を過ごすぐらいならば、自分が干渉できるところには入り込んでいきたいと思うだけのことだ。

ある意味では僕たちは秩序を作っている。

そう言う意味でも僕は監視者であり、調停者であるのかもしだれない。

ただ、先述のように僕の存在を知っている人はきわめて少なく、実際に世界で生活している人たちの殆どの人は繰り返しになるが僕のことを知らない。宿主も僕のことを知らない。

監視者に求められるのは、世界の歪みを何とか小さな地震レベルに押さえる事だと僕は考えている。

監視して、観測して、隠密に動いて、良いところなど何一つとしてないようにも思つが、僕は体と意識を借りている身だ。

不思議と乗つ取つてしまおうというような気は起きない。

ところで世界では、この世界の極みに對して表面化しようとしている流れがあるようである。

僕と、また僕と繋がっているクラスタのメンバはこれに對して否定的な意見を持つているモノが僕を含めて多くいる。知らぬが仏と言うが、もしも僕たちのような存在が世に知らしめられたときには宿主の世界では大きな混乱が起ることは容易に想像できるからだ。

幻覚や幻聴と蜃氣樓等は別のモノだと考えられていた。

つまり、メンタルなものかフィジカルなものか。

しかしそこにはあまり垣根がないと言うことが、頭のいい人によつて暴かれようとしている。僕としてはそれは困る。

もし、例えば“科学的に”サイキッカのことについて答えが出てしまつたら、サイキッカ狩りが始まるかもしない。

昔々なんの根拠もない魔女狩りが行われたように。

今度は根拠のあるサイキッカが刈られる。

そもそもサイキッカには人によつて様々な能力があり、それぞれのサイキッカによって能力の振れ幅が大きい。

歪みの干渉をもろに受けている人ほど、難しいことが出来る、と言う事が起こつてゐる。

そのサイキッカが無自覚で世界を回している事もきっとあるのだろう。

ところで、この、不可思議な一連の現象についていくつかの点についておさらいしなければならないことがある。

サイキッカは他の人が見えない世界を見ることが出来、他の人が持つていらない何らかの能力を持つていてる。

人気のライトノベル、ブギー・ポップは笑わないのキャラクタには未完成ながら未来を見る」との出来る青年が居た。

サイキッカの多くはそのぐらいの中途半端な能力しか持つていない。超強力な攻撃スキルはもてない。何らかの手続きを踏んで、自分を有利に出来るような能力を持つている人も居ない。

地味な例を挙げると、

『シャープペンの芯を自動でノックした状態に出来る』

や、何となくぼやけた未来が見える、などという所がサイキッカの現実的な認知されて

いるレベル。

そして、サイキッカには程度の差こそあれ、蜃氣楼、目に見えるモノ以外のモノはまづ見ることが出来ない。アマツチの家の玄関の近くでの大量の猫の死体は、本物ではなくほとんどがVTRのようなモノだ。

サイキッカでない人の殆どがそのような蜃氣楼や幻覚を毎日どこかで見る。

幻覚がない世界が本当の世界の姿なのだと定義したら、殆どの人間は本物のあられもない姿を見ることが出来ず、生活をしていることになるのだろう。だけれども彼らにはそれは強烈な幻覚であり、本物ではないと言つことが五感によつて判つているし、それらは自分たちになんの害も与えないことを知つている。

確かに多少の不快感や不安はあるられるのだろうが、その程度のモノであつて、生活にそのまま直面して困るような幻覚は見えない。

それに対してサイキッカ達は幻覚も蜃氣楼も何も見えない。

見えるサイキッカもいる。

それは人によって程度があるのだ。

しかしながら、非常に不思議なことに僕たちにはサイキッカは居ないモノとして扱わなければならぬ事になつていて。

指示で、世の中的にはサイキッカの存在を認めていない。

それは認めなくとも何とでもなると言うことと、高度に発達した言語について『一つ一つを読み解く』こと。として考へてゐる故なのかもしれない。高尚な意識は僕の所までは届かない。

結局の所僕たちは傍観者で在り、完全な第三者である」としかできないのだ。

僕に触れることが出来ない。僕は宿主が触れる感覺を、感情を、感傷を味わうことしかできない。

そして僕が感じてゐるクラスターと、それらについて何となく意見を交換することしかできない。

僕たちに報告の義務はない。

だから僕たちは高尚な意識にレポートは送らない。

## ◆ 六一一

「死ぬつて言つことはさ」

誰もいゝ病院の屋上で彼女は呟いた。

「きっと大変なことなんだろうな」

空は真っ青で、雲が流れていた。

あの雲たちはきっと自分たちが今どんな形をしているのか、どんな風にして愛でられているのかと言うことはきっと知らないのだろうな。そしてその瞬間は切り取られ、誰かの思い出になつたりするのだろうな。そんな風に彼女は考えた。

「あの雲のようにふつと死ぬことが出来たら楽なんだけどな」

などと嘯いてみた。

「私はきっと死にたがりで、本当にもうすぐ死ぬのだし今更何を怖がっているわけでもないのに、大切な人は随分前にもう私の前からは消えてしまつたし、だから今私がここに生きている理由なんてどこにもないわよね」

「だからって死ぬことは大変な労力が必要だと思うわ、あの雲のようにふつと存在が無くなつたことを気にされないようなモノだつたら私だってそんな難しく考へることはなけれどそういうじゃない、もう関係がないと言つてもきっと彼はそんな私を見て不思議そうな顔をするのだし、私の知らない苦しそうな顔をするんだから」

空は高く、風は強かつた。

彼女が誰に向かつて話しているのか、彼女のその言葉は独り言なのだがやけにはつきりと誰かに向かつて話しかけているようだつた。独り言にしては強く、獨白にしては断定的すぎる、考え方にしては質問事項が酷く少ない。

それはまるで、まるで教師が生徒に言い聞かせるような、静かに叱つているような不思議な口調だつた。

「私はね、自分の体のこと、あんまり知りたくなかつたんだけど、君は知つていたのかな？」

ふうっと息を吐いて彼女はまた言葉を続けた。

「だって自分で言うのも何だけど客観的に見たら、私が死にたがりだつて事を抜いたつて私は未だそんなに人生を経験した訳じゃないし、少しばかわいいし、好きな人だつていたし好きでいてくれた人もいたし、両親は私のことを大事にしてくれるし、だから死ぬ理由なんて一つもないような気がする」

アハハ、と笑つた。

乾いた声だつた。

「病気で死ぬなんてぜんぜんヒロインじゃない」と、笑つた後で彼女はいつた。

「ねえ、君は、知つてたでしょ?」

君つて誰かな?

「惚けないで、君は君だよ」

誰の答えを待つて いるのだろう？

「君は するいよね、私に 寄生して、私の心の中をずっと見ていたはずなのに、私のことなんか知らないって 言う感じで ずっとそっぽを向いて、私が 本気で 悩んで いるのに助けてあげようか？」の一言もないんだ」

白いシーツが彼女のそばで揺れている。

風が吹く。

彼女から見える病院の窓はない。

彼女が見える病院の窓はない。彼女がそこにいることは彼女以外の誰も知らない。

「ねえ、恐怖って何から来るモノだつて君は思つてる？」

彼女は最初の頃のような素朴な口調ではなくなっていた。

断定的で、酷く冷たい声だった。

「恐怖って 言うのは、私は思つんだけど、君のようなモノに脅かされる」と何じやないかな？それはさ、影みたいに……」

やめなよ、死ぬよ？

彼女の心が、彼女に言った。

それは自分の意識で だした言葉のようにも思つた。

「違うわ、君は私じゃない、私が君じゃないように、君は私とは違つ意識」

私は私。

「違うわ」

と彼女は断定した。

「君は君、私は私」

彼女の心は何も 答えない。

「そして君は私、私は君」

だから私は私。

「でもそれは違う」

何が違うの？

「私には判らない。でも君は知つてる」

私は君だよ。

彼女はまたアハハと笑つた。

右腕で流れてくる涙を拭つた。

「嘘つき」

彼女は答えない。

「君は私の心で さえない」

その涙はコンクリートの上に落ちて、黒い染みになつっていく。

「空はキレイだね、太陽も美しいね、私たちが見ている世界のどれぐらいが嘘をついた幻覚なんだろう？本当の世界を私は見ることが出来ないんだね」

私は見てる。

「違うわ、だつてあなたの感覚は私のモノだもの、私は何度も誤ったモノを見てきたもの、そのたびに驚いたり少しおかしな気分にさせられて、あなたはその感覚も共有しているもの、客観的な世界をあなたは知らない」

そんなことはない、私は、私はちゃんと社会と向き合っていた。

と心の中で彼女は自分に言った。

「でもね、それは本当のことかどうかなんて判らないでしよう？君が一人でこうやって泣いていることも君が本当に望んだことなのか自分が望んだことなのか私が望んだことなのか、二人が望んだことなのか、本当は一人なのか、君には判らない、私の混乱のことがよく分かっているように君には私の苦悩は判らない」

拭いても拭いても落ちる涙を彼女はどうすることも出来なかつた。

「私が病気なのは別に良い」

と、不意に彼女は話を元に戻した。

「私が死ぬことも別に良い」

とも彼女は言った。

「ただね」

もう彼女は涙を拭こうとしなかつた。

深呼吸をして、言葉を続けようとした。

しかしそのあととの言葉はなかなか出てこない。

ゆっくりと太陽が一つになる。

太陽が二つになるとなどあり得ない。コレは幻覚なのだ。

はつきりとした白昼夢。この夢を一体何人の人たちが目撃しているのだろう？彼女が思つていたことはそう言うことだ。

「どうして君は私とメグリヌを引き合わせたの？」

あなたが望んだから。

「そうね、そうよ」

たなびくシーツは、何重にもなり、空にも届きそうな高さでどんどん伸びてゆく、はためくスピードがゆっくりになる。

「世界はあまりにも複雑すぎて、私にはわからない事だらけ、だから少しでも真実に近づきたいと思つた」

だから有名人メグリヌに会えば少しは疑問が晴れると思ったんじゃなかつたの？

「そう」

あなたがガンである」とも、若いからすぐに其れが全身を駆け巡ることもあなたは受け入れているじゃない。

「そう」

だから、何が起こってもいいと思って偶然をムリにしてメグリヌに会いに行つたんでしょう？

「彼女は声には出さず、口元だけを動かして、そう、と言つた。

メグリヌはあなたに言つたわよね？」

『君は知りたがっている。事件の全貌と、解決方法と、何が謎であるのかを。君たちが呼んでいる呼称を使うのならば僕自身を形容する言葉は一つ。サイキッカとなるだろうね。でも僕自身はあまりそれを好まない。僕は僕自身を評価できないのだから、その肩書きはどれをもつても足りず、どれをもつても過ぎた大きなもののようにも思うからだね。』

と。あなたは、それから時をおかないで私と、あなたが君と呼ぶ私の存在に気がついてしまつた。だからあなたのことを私は殺さなければならない。

「理不尽ね」

世界の心理を知つてしまつたら、この世界はたち行かなくなつてしまつ。あなたのようになき付いてしまう人の方が多ければ私たちは随分違う役割を与えられていたかもしれない。でも、それも『もし』でしかなくて、私はその可能性について考へることが出来ない。そう言う権限は持つていない。あなたが考へていることの一部分を間借りすることしかできないから。

「君は、私のことが嫌い？」

と言う彼女の問いに対して彼女の心は、いや、と答えた。

「私の言うことを一つだけ聞いて欲しいの」

かなえられるモノなら。

「プリミティブで、本当の、シンプルで何もない世界を見てみたいの」「そんなに死にたい？」

「わからない」

彼女の涙は視界をどんどん奪つていった。

「でも、このままは嫌なの、私を貶めた世界の姿を知らないで死んでいくのは嫌」

彼女の心は答えない。

「世界の本当の姿をサイキッカは見ていると言つた。其れって本当は辛い事なのかな？サイキッカが見ている世界は本当はとても辛くて、私たちが想像しているモノとはかけ離れて辛いモノなのかな？」

彼女の心は答えない。

「私は知りたいだけなの」

あなたは…、

「君の弁明はもう聞きたくないの、私にその世界の姿を見せてくれるのか、それとも私をこのまま君たちの規約に反して死ぬまで生かしているのか、どちらにしても私はこのままならいつ死んでも同じ」と言つて一気に息を吸つた。

胸が動機で破裂しそうだった。

コレじや本当に死にたがりで、時間を早回ししているだけみたいだな、と彼女は思つた。そして同時に、『まあ、それも悪くないか』とも思つていた。

「君は、私に世界を見せてくれるの？それともかたくなにノーなの？」

あなたの意志の通りに。

「じゃあ、私は風に飛ばされればいいのね」

世界の本当の姿、お見せいたしましょう。

嘘つきね、あなたは死にたくも、病気も嫌なくせ」。

## ◆六一一

何かが、人のような少女のような何かがゆらりと随分ゆっくりとした速度で屋上から落ちていく光景を病院勤務の医者や看護師や患者は見た。

すぐに何人もの医師が駆けつけ、担架で運ばれたが、少女は、少女と言つには大人びてすぎているが、彼女は即死だつた。

彼女が重度のがん患者で、その直前に主治医から入院を強く勧められていたことが明らかになつた。病院側では、それを苦にした自殺、もしくは事故とした認識を公式発表した。

その日は風が強く、うつかりすると風で飛ばされてしまうことも十二分に考えられたからだ。

話はそれるが、病院側としてはどちらにせよ社会的責任を取らなければならぬ状況であることは変わりなかつた。

メグリヌは、病院の中が急に慌ただしくなつたことと、遠目に誰かが屋上から落ちたことについて『多分さつきの彼女だろう』と言つような予測を付けていた。

「そう、気が狂つてしまふと言つことは、ある意味ではそう言つことなんだよ」誰に呟くでもなくメグリヌは言つた。

「自分自身に対しての一番の敵は自分で、自分という自我と、もしあるのであればメグリヌのメグリヌではない誰かが住んでいる可能性があるのだから、僕がそつだつたように」

無表情のまま、メグリヌは言った。

「彼女は死ぬことに対して特に苦痛を感じていなかつたのか？」

と独り言を呟いた。

「さて、僕は僕でも、もうこれ以上の犯罪らしく『事』をしていかなければならない」もちろん予約後の解釈、シンタックス書き方など。

### ◆ 六一三

ぞくりとした背筋の感覚は私がさつきまで感じていた影の怖さと同じモノだった。この空間に来てからすっかり気を抜いていた。

しかしこの感覚は間違いなく私に影が何かしらの影響を与えるようとしているモノだ。だから、私はその感覚について間違うことはない。私は間違いなく誰かに狙われているのか無作為に探索されている身であつて、例えば其れがポートスキヤンのようなモノであれば、私の弱いところはすぐに見つけられるだろう。そうすれば私はすぐにでも飲み込まれてしまうだろう。

部屋の片隅でカタカタと震える私は、少しだけゲームをもくもくと続ける少年に視線を移した。

うつろの表情でちいさなモニターを見る彼。

どうやってみても高校生にしか見えない彼は、しかし街ですれ違う高校生とはまるきり違う感覚を私に与える。

彼の強さのようなモノはきっと見かけ倒しですぐに壊れてしまうモノなのだろう、など私は予想したが、すぐにその言葉はもう一つの可能性について模索することになり、『まあ、どちらにせよ』と言う結果に落ち着いた。

彼は既にその壊れた世界を経験しているのではないか‥。

私が今まさに抱えている恐怖を彼はもう既に知ったことがあり、このイラストレーターがいる空間で、この異様な空間でも何も疑問を持つことを無く過ぐしていることが出来るのだろうか？

そう思うだけで私は氣を紛らわせる」とは出来た。

だけど体の震えは止まらない。

私の前には影があつて。

私の後ろには影があつて。

私の左右前後には影が居て。

部屋の中はいくつかの白熱灯があつて、スタジオっぽい雰囲気を作つてゐる、その光源が私の影を分散させる。

少し氣を抜くだけで私がばらばらになつてしまいそうで、怖い。  
影は私に確実に近づいてくる。

何が目的なのかはその時には未だわからない。だけど、その本当の目的が判つたとき私がきちんとこの場所に留まつているという自信はない。

ぴたりと部屋の中の音がやんだ。  
少し遅れてゲームの電子音もやんだ。

私は、顔を上げる、彼ら三人は私を見つめている。

不思議そうな顔だつた。

あるいは辛そうで、あるいは無表情で、私を見ていた。  
どうして私をそんな目で見るの？

私は何も悪いこと何かしていない。

『大丈夫？』

大丈夫なわけがない。

『飲み込まれたか』

飲み込まれた？

虚ろな頭の中でその言葉の響きが随分しつくり来るような気がした。

私は何かに飲み込まれようとしている。

全てはアクリルの壁の向うで行われてゐる会話のように聞こえた。振動するその音も  
酷く弱くて、目に見える光景も不安定な視界、アクリルの壁の向う側で…。

向う側？

私は今までその空間にいて、彼らと話すことはしないまでも彼らと同じ条件で椅子に座つていたはずだ。

其れがどうして私だけがこの世界の中でひとりぼっちの中になつてしまつたような錯覚を覚えなくてはならないのだろうか？私は祝福されない子、だけどそれでももつと普通に生きていくと信じていた。

祝福などと言う事場、私は使つたことがない、彼女の日記に出てきた言葉を引用したのだろうか？

「私は今どこにいますか？」  
私は言った。

誰に向けていったんだろう？

その言葉は一体誰に向かって、放たれたのか。それとも内部で完結してしまったのだろうか。もしかするとその言葉は私にしか聞こえなかつたのかもしれない。

だけどいいと思った、「ここならきっと誰かには通じることが出来る。

何故私はこんな会つたばかりの、それも奇妙な人たちにそんな事をを思うことが出来る？

嗚呼、コレは信頼というやつなのかもしない。

そんなことを思った。

幻覚でも、勘違いでも、私が望んでいるモノ。

彼女は私に言った。

「結局の所、人は人なのよ、自分のことで精一杯で他の人のことなんか考えようもしないの、だからね、死ぬことに何の意味もない、彼らは死んだことで過去だけをこの場所に置いて去つている理不尽な存在、気にしなくて良いのよ」「と普段要領を得ない彼女が酷く断定的な言葉を発したので私はその言葉をはつきりと覚えている。

それは、愚痴のようでもあり、あきらめのようでもあり……。

彼女は一体何を見ていて、一体何に交信していたんだろう。

私は判らないままだつた。

そして私はそれを知りたいと思っていた。

「そうだ、私は知りたいと思つていた」

と呟いた。

「私は知りたいと思つていたんだ、彼女のことを、彼女の考えている」と全部とは言わないまでも、おおかたの所を」と口に出していく。

『なんだつて？』

遠くで声がする。

きっとあの三人組だろう。

私のことを心配してくれているの？それともただただ私のことを邪魔者だと思つているの？

余計な面倒を…と思つているの？

まあ、私にとつては、どちらでもいいと思つた。

そして私は闇に吸い込まれていく。

自分の意志とは無関係に、どんどんと暗い闇の中に意識が埋もれていく。  
助けて欲しいと心の底から願うのと同じぐらい、まあ、こういうのも仕方がないのか  
な、と言う風に私は諦めていた。

世界は真っ暗になつた。

## 【7】 ハレも世界

「・・・のか」

遠くで誰かが話したような声がする。

「いいけどね、でもそんな人に道づれにするモノじゃないぜ」「同じ声がする。

ぼんやりとした視界、光が、そこにある。

誰かがいる気配はない、飛行機が高いところを飛んでいるようなそんな低く遠く高圧的な、「おおと言う音だけが聞こえている。ただその音量は酷く小さく、一定で近づいたり遠くなったりする事はない。

そして男の声。

私は未だぼんやりとした視界の中、目をこらす。

暗い。

私はどうやら何らかの地面の上に倒れているらしい、私のすぐ近くから淡い光が伸びている。眼球だけを床からその逆へと移すと、本来星があるところには、星と同じような、しかし酷く非現実的な模様が見えた。

星空と言うにはあまりにも近く、模様というならランダム過ぎる。写真でしか見たことない星雲、と言う言い方も出来るだろうか? もしくはフラクタル。「紛れ込んだノイズ、君が作った世界で、君が夢見た世界で、君が選んだ世界で、僕の見たことのない世界」

フンと男は鼻を鳴らした。

「酷くファンタジックなモノが好きだと見えるな、乙女趣味というにしては多少ファンタジーの要素が大きいか? どうして天井にフラクタルなど、つた模様などを思い浮かべた」

つた模様?

「ただ、つた模様と呼ぶにしてはその線は酷く混乱している、そして遠すぎる。此所から見るとただの線の集合体、点が連なった、さながら星雲と言つたところ」

「あなたは、だれ?」

私は目の前に誰かが居ることによく気がついた。

「僕が誰かと君が聞きたいのか」

男だということらしいことだけは声のトーンで判る。

「君とは違う時間に済んでいる人間さ」

と言つて、ふっとため息とも息継ぎとも取れる、ブレスを入れた。わざとらしく、話す

のも煩わしいと言った感じが伝わってくる。

「この世界は私の想像の世界？

この模様は私が思い描いていたモノ？

私はこんなものが好きなの？

「無駄話はあまり趣味じやない」

男は言った。

「時間は無限にはない、だがその時間についてここでせかすほどに我々は急がなければならぬ理由なんて無い、ましてや君はある女の残した残滓を受け取つただけ、…運命を受け入れられないからこんな所に来てしまつたようだが、君が頼つた男たちもまた君と同じように別の世界に飛ばされてしまつたようだぞ？」

最も、と男は続けた。

「ただ、他の三人とは違ひ、君は君の意志でここに来た」

「…私は、そんなこと、望んでいない」

「君は望んだんだよ」

「どうしてそんなこと望まなくてはいけないの？」

「それは僕が聞きたい」

男は体の底から冷たいモノを感じさせるようなそんな冷たい笑い声で笑つた。  
「君のような人が来る度に僕のエネルギーを使って、部屋が模様替えされるんだ、君だって全く知らない赤の他人にいきなり部屋を改变されたらあまりいい気にはならないんじゃないかな？」

冷たい笑い声が続く。

「君が何故ここに来たのかは知らないが、それはまあ、一つの運命なんだろう  
「…うん…めい？」

私は言った。

どんな運命を私は望んでいるというのだろう？

「私はどんな運命も、望んでいない」

答えはない。

指先の感覚が戻つてくる。酷く冷たい床。普通なら自分の体温で床もぬるくなつてしまふはずなのに。

私はしびれる足と腕に力を入れようとした。

「ムリはしない方が良い」

彼は言った。

「あなたに、何が、わかるって、いうの？」  
話すための力は不思議と必要としない。

「時間は有限だが、そんなに短いモノではない、ゆっくりやろう」

それから私が立ち上がりれるようになるまでそんなに時間はかからなかつたと思う。

ただ力の入らない腕、動かない足、頭を持ち上げることも、億劫だ。

疲労とは違う。力が入らないことが苦痛なのではなく……ただ、むなしく、無意味で、だから面倒なのだ、何もかもが。

しかしそれは私の心の内の八割方の意識であって、残り二割は違う。

疑念ばかりの私が、その無感情で、面倒くさがり屋な自分をゆっくりと起き上がりさせる。

男は相変わらず同じ所にいる。

どんどん視界がクリアになる。空……と言うには近い、天井と言うにはあまりに遠い、そこには男が言ったように無数のつた模様が描かれている。

つた模様は地平線まで伸びて、床にも続いている、私の足下が光の発光地点であるかのように、自分の足下には太く、はつきりとした模様の端がかかっている。にもかかわらずここはあまりにも暗い。

ふと目の前に視線を落とすと白いテーブルとイスが目の前にあった。

「コレはささやかな僕からの君へのエールだ」

私はふらふらと、二歩前に歩き、イスを引く。

男は既にテーブルに着いている。

「君は紅茶が好きかな？いいよ、返事をしなくとも判る、君はそんなに紅茶もコーヒーも好きと言うほどではない、でもどちらかと言えば紅茶が好きだ、だから僕は君に紅茶を出して差し上げようと思う」

いつの間にかテーブルにはティーセットが置かれている。紅茶の、茶葉が開く良い匂いが鼻孔をくすぐる。

コレは幻覚ではないのか？

「コレは、本物……？」

私はカップを持って、その暖かさを感じた。

「コレは本物だよ」

男は言った。

「君たちは随分疑り深い、どうして『自分たちがこの世の中に存在している』何てことを堂々と思ってのけられるのだろうね？罪深い、非常に罪深いとは思わないかい？」

わからない、と私は言った。

「わからない、か、……正直だ」

男はずっと笑っている。何かがおかしいと言ったような事は何もない。笑える要因があ

るとも思えない。

「何故笑っているんですか？」

「ゆっくりとした会話には笑顔が大切だと僕の先生は言っていたのでね」

「先生？」

「君にも先生はいるだろ？」

「私の先生は、」

「じつと男はいって、私の言葉の続きを遮った。

「『』では名前を出したら無くなってしまう、そうだな、君は自分のことをなんと呼んでいる？」

「私」

「私、……なるほど私でもいいんだが、もっと別の呼び方はないのかな？」

「それならば、『k』

「いいね、『k』でいいこう」

空があんなにも明るいのにどうしてだか男の顔は見えない。

「k、世界とは一体何で作られていると思う？」

「世界？」

「時間と語つても良いかな、社会的な営みの根源は何だと思う？」

「どうしてそんな突然哲学的な」と話を必要が？」

「時間は沢山あるんだ」

と言つてティーカップを持った手を下ろした。  
力チャヤリ、と言ふ音がする。

「わからない」

「賢明だね」

だけど、と男は続けた

「それはでは物語は続かない」

「世界とは光だ、光があるから人は争い、その光を征服しようとする。エネルギーは光だ。物質とは光に寄つて其のが物質としての形を取ることが出来る。例えばこんな風にしてティーカップの中の紅茶は、質量としてある以前に、我々に認知されなければそれは紅茶として成立しない。ティーポットの中身は有限であると我々が認識できなければそれは有限だという照明が出来ない。これらに必要なことは光だ。光は時間を作り出し、時間はその反作用で物質を物質然とさせていく。時間とは光だ、光とは時間だ。kが僕の顔が見えないことは僕の顔が、姿が、光を反射しないためだ。そこには虚無しかない。あるいは何もない。実体は遠い昔、もしくは遠い未来にいるモノだ、たまたま『今現在』

不在なだけだ。だから君はそのことについて何も不可思議に思うことはない。もしくは思ったところでそれは解決しないし、君と僕は既に出会っているのだから、自分が思い出せば済むことだ」

「彼女とは、…私の友達の…あの娘のこと?」「

私はなぜだか、後ろめたい気持ちを持って彼に尋ねた。

未来を見ることが出来る彼女、彼女の能力の干渉で私がここにいるのだろうか?「残念だけど、君の先生はその彼女ではないよ。君に影響しているモノは、君の世界にとつても僕にとつても驚異だ。だから排除されなければならなかつた。君、彼女とは人間あらざる事を自分で辞めてしまつたモノを指すんだ」

いくらか口調が優しくなつてゐるようを感じたのは私の勘違いだらうか?

「彼女は君とはあまり縁は深くない、しかしね、光と同じようにエネルギーもまたこの世を作る、本質的な要素だからね。エネルギーは共鳴しやすいモノを探すんだ。君はよく幻覚を見るかな?街の至る所で様々な嘘を見ることがあるかな?それらはね、共鳴しやすいモノに反応して、それにとりついているモノなんだ。君が彼女を吸い寄せたんだ。もしくは彼女が君を選んだ。宿主として、触媒として最適だと無意識で選定したのだろうと僕は考える」

どんどん男だと思つていた声がなんだか女性のモノのように感じられる。

「あなたは…」

しつと、口元を彼は押さえた。

何故だ、手と口が、見える。その手も口元も、どこかで見たことがある。

「未だ早い、未だ焦る時間じゃない」

と彼は言った。

「と言つても、君も、少々飽きてきただらう?僕の講釈なんか聞きたくないという顔をしている」

私はゆつくりと頷いた。

「君が触媒になつたのは幸いだつた。」

と言つて、その見える手で、その指がパチンと音を鳴らした。

白かつたテーブルが茶色い木製のモノになり、床は、ロッジのモノのような板張りの床になつた、彼の後ろにはよく燃えた暖炉がありぱちぱちという音を鳴らしている。おかしな模様が入つていた上空は、その暖炉の炎が彼の影を大きく映している。窓があり、外は雪に覆われているのだろう。真つ青な闇がそこにはあつた。

相変わらず部屋は暗い。

そして相変わらず彼の顔はよく見えない。

私はティーカップからマグカップに変わつたそれを手にして口元に運んだ。

「ん？」

「すまない、そうだね、紅茶は冷めてしまつたからコーヒーに入れ替えておいたんだ」  
苦い味がした。そして、ほどよく甘く、ミルクの香りがする。

「ブラックの方が好みかな?」

「いえ」

「そう、だと思つたんだ。僕には確信があつた」  
確かに、少し甘いカフェ・オ・レの方が私は好きだった。紅茶だと思って口に含んだときのギャップには驚いた。

もう一度ゆっくりとカップを持ち上げて口に含む。コーヒーだと判つていれば驚くことはない。

私が好む味の、それも理想に近いただのカフェ・オ・レだった。  
目の前の彼は最初のような威圧感はなくなつていた。

むしろこの空間を少し楽しんでいるようにさえ見えた。

「君に  $\text{t}_e$  と言つた彼、面白いね」

私は直前の記憶をフラッシュバックさせる。

「あの三人は、どこに……?」

「君と同じように眠つているはずだよ」

「眠つてゐる?」

「そう、ただ寝てゐるだけ。君は、そして誰しもが「マグカップをぎゅっと握る、コレは嘘なんかじゃない。

「いや、君が  $\text{t}_e$  と言つた男、眠つてゐるわけではなきそうだな」

面白い。と言つた。

「彼だけですか?」

「そうだね」

彼は楽しそうにカップの中身を回転させる。

「悪夢に意味は無い」

と言つた。そして、

「しかし眠りは覚める、どんなに深くとも少なくとも眠りであるうちは」と彼が言つた。

「コレも夢?」

「さつき言つた」ととは矛盾するかもしれないが、君たちから見ればそれでも良い、だけどコレは本当であつて、コレも一つの事実

ゆっくりとした動作で自分のカップを口元へ運ぶ。

どうしてもさつきの疑念が私を一つの疑問に縛り付ける。

私はこの人を知っている。

「tと言った彼の能力は世間が認知される其れではない、彼のそれはあまりにも世界への影響力が大きすぎる」

しばらくしたあとで彼は口を開いた。

「君は彼がサイキックだと知つて、それでもなお、あの能力について疑問を覚えたのだろう？それはただし、アレは人ならざる所にまで消化されてしまった、原動力はどこにあるのか、誰にも解明できない、君がここにいる事を誰にも説明できないように、証明できないように。彼の友達は面白い、何故あんなにまでして『献身的』と言つても良いかもしないな、身を粉にして働くのだろう、そうは思わないか？」

「それよりもあの少年が」

「あの少年は傍観者だ、ただの君と同じように感じてしまつた一人に過ぎない、それもかなり遠いところからその輪に加えさせられた感じはあるが」

私はぎゅっとマグカップを握つて彼に質問をする。

「あの少年は、誰です？」

「彼はただの人間だよ、感じやすく、触れやすい……なるほど、tは眠らず、少年はもう目を覚ましたようだ」

「目を覚ました？」

「君もそろそろ僕の相手をするのは疲れたんじゃないのか？」

と彼は言った。

「いや、謎が…謎の今まで、もっと沢山聞きたい事が」

「それは許されないんだ」

といった。

その時外で閃光が走つた。

目の前の彼の顔がうつすらと映つた。

真っ白に浮かび上がつた顔は、私だった。

「え？」

と私は言った。

「おやすみ、きっと悪い夢さ」

遠くでそんな声が聞こえた。  
彼は、いや彼女は、いや、私という自分が自分について闇に落ちるその直前に私に声を掛けた。

## 【∞】離れてゆく影に向かって

わだしから引き離されたあとすぐに、私の意識は薄く目を開ける事が出来た。

部屋が白っぽくなっているように感じた。

全てが線で出来ていて、全てがぼろぼろと崩れているような、そんな印象を受けた。  
「」はどうだろう、私の存在している空間は、全てにおいて少しづれてしまっているの  
だらうか？

白っぽい部屋は、朝焼けのせいで無彩色だったのか、やつべつとその彩度を元の色に戻していった。

朝のマジックアワー、PCのファンの音が部屋を支配していた。

遠くで誰かが電話をしている。

内容はよくわからない。仕事の話のようだ。

きっと新村さんだろう。

私には関係のない事だ。

うつすらと目を開けていると、少年が私によつて来て、私が寝かされている（のであ  
る）ソファの前に座った。

「君が涙を流しているわけを知りたい、でもそれよりも、今はゆつべつと今度は本当の  
眠りについた方が良い」

と畳つて座つたソファをすぐにたつた。

私の目の前に顔を持つてきて、私の目元をタオルで拭つた。

私は何も出来ない。

「ねやすみ」

あっがとう。

そして再び私は眠りの闇の世界へと連れて行かれた。

### ◆ 8-2

新村が目を覚ましたとき、アマツチは全ての仕事を終えていた。百枚近いイラストの  
カットが書き上げられ、出力見本がプリントアウトされてファイルされている。当のア  
マツチ本人はテーブルの上で十円玉を片手で回しながらコーヒーを飲んでいた。

「ねやす」

アマツチは新村を見ざむやうに畳つた。

未だ起き上がつても居ないのに、」いつはサイキッカである上にエスパーでもあるのか？いや、エスパーも含めてのサイキッカか…。

「ああ、寝てしまつていたようだ」

「原稿は終わつてゐる、そこにあるから、先方に連絡をした方が良い」「助かる」

「其れが終わつたらコーヒーを淹れよう」とアマツチが言った。

「いや、自分で淹れるよ」と新村が言う。

「僕が淹れときますよ」と少年が言った。

「君は眠らなかつたのか？」

「はい、あ、いや、厳密にはずっと起きてたのは叔父さんだけかな。少しうつむかうつむかしゃいました」

ほんとうは、結構寝ていたんだけどな、と少年は心の中で思つた。

ふらふらと起き上がつた新村は何度かのびをして、アマツチの仕事をチェックした。夜が白み始めている。

一体どんな効率で書けばこんな手の込んだモノをこれだけの物量で仕上げる事が出来るのだろう。

何度もその作業の進め方を見ている新村でさえ、アマツチの能力については疑問をいだかずにはいられない。

少年はコーヒーミルを使って手際よく豆をひく、コンコンという音をさせてミルに残った粉をペーパーフィルターへと落とす。

お湯が沸くまでにはもう少し時間が必要だと判断した彼は、ソファの方へ歩いていった。

新村は原稿の一通りの品質チェックをすると、担当へメールを打つた。  
すぐにコールバックがあつた。

「朝の五時半だぞ、全く」

氣を遣つてメールを打つたのに、意味がないな。と新村はその時思った。

「もしもし、お世話になつております…アハハ、お疲れ様です」

と軽やかな一連のやりとりを新村はしながらビジネスを進めた。

少年は少女の目元を拭いている。そして小さな声で何かを呟いている。  
薬缶がコトコトという音を鳴らす。お湯が沸いたのだ。

少年はキッキンへとゆっくり戻る。

アマツチはもくもくと十円玉を回す作業を続いている。どうしてあんなにキレイに片手で十円玉が回るんだ？

新村はそんな事を思いながら、先方との次の打ち合わせについて口頭での約束を取り付けた。

「ありがとうございます、それでは、明後日、ああ、明日ですね、伺わせて頂きます」と言って電話を切った。

アマツチの方を見る。

少年はコーヒー豆を蒸らす作業に入っていた。

「わるかつたな」

「いや、影が、僕の邪魔をしたんだ、家に入れなかつた僕がいけない」  
新村は少し迷つてから、家の周りの状況と、アマツチの家の中の状況を簡単に伝える事にした。

「なるほど」

「おまえには見えていなかつたってわけさ」

「でも、多分もう消えているという気がする」

とアマツチは十円玉から目を離さずに新村に言った。

香ばしいコーヒーの香りが部屋中を包む。

少年がコーヒーカップを二つと、ポットを一つもつて、テーブルの近くにやつてきた。

「コーヒーは自信あるんですよ」

と、笑いながら新村の前にカップを置いた。ポットからコーヒーを注ぐ。

「叔父さんは如何です？」

「頂くよ」

と言って三人は淹れ立ての香ばしいコーヒーを口にした。

「ハア」

とアマツチが言つた。

「こんなに集中したのは久しぶりの事だな」

新村は言った。

「こんなに混乱した仕事は久しぶりの事だった」  
少年は何も言わなかつた。

新村は夢の中で、じつと待てとだけ言られた。

「二数時間の出来事で何もなかつた事がある人間は居ないはずだ。少女は未だ寝ている。

一体少年は何を見たのだろう？

そしてその少年は、そもそも何故「んな所にいるのだろう？」

「宗治君と言つたね、忙しくて話を聞けなくて悪かったと思つている」とアマツチは話を切り出した。

「はい、叔父さん、だけどその話には決着が今のところ着いたようです」「と、言う事は僕に相談しなくても良いと言う事かな？」

「そうですね、だけど、もし与太話に付き合つて頂けるなら、少しだけ、お話をさせて頂けませんか？」

少年は照れているようにも、毅然としているように見えるような態度だった。どちらとも判別できない不思議な声のトーンだった。もしくはその声のトーンは初めて聞くモノだったのかも知れない。

「与太話、ね」

と新村が言った。

「アマツチの十円玉も割と気になるところだけど」と語りうと、アマツチが、十円玉を止めた。

「コレは別になんの能力もいらない、コツのようなモノだ」そしてピンと親指ではじくと、新村の胸ポケットにそれを入れた。

「はいはい、器用な事で」

「ちなみに今のは補正に能力を使った、ズルだな」新村は十円玉を確かめずにティーカップをとった。

ポットの中にはあと一杯分のコーヒーしか残っていない。

「話の前にコーヒー、足しましょうか」

と少年が言った。

「実はその必要はないんだ」

とアマツチが言った。

アマツチは、ポットを少しふつた。

そして蓋を開けると、そのポットには八割方までつがれたコーヒーがあつた。

「こいつらのチートだから外では使わない、倫理に触れるような事は日常的にやらない事にしている」

まあ、と言つて、

「今回のようなちょっと特別なときには仕方ないと黙つて割り切つて能力を使うのだけれども、結局能力を使うことは限界がある。でも、今みたいにざるをしてそれで誰かが幸せになるのであればその方が良いのだろう、世の中的には、一時的には、きっと。僕

はそんな風に思つて能力と付き合つてゐるよ」と言つて話を切り上げた。

「君の話を聞きたい」

とアマツチは少年に話を振つた。

「たいしたことではないんです」

しつとした態度で少年は話を始めた。

「僕には幼なじみで、ちょっと変わつた能力を持つちゃつた恋人が居たんですけど、彼女は死んでしまいましたが、僕はきっとそのことについて全く受け入れる事が出来なかつたんだと思います」

話は続く。

「理李というんですけどね、僕は彼女の顔をまともに見た事がなかつた事に死んでから気がついたんです。毎日のように一緒にいて、毎日のように話していたのに、僕は彼女の事は何でも知つていていたんですけど、死んで、その葬儀に参列して、そこに彼女の写真があつて、そしたら『ああ、こんな顔だつたんだ』って思つて」

フフフ、と彼は笑つた。

「それから随分たつて、おかしなメールが来たんで、僕はここにいるんです」「それだけ？」

新村が言つた。

「そうですね、あいだはそんなにきつと重要じゃないから、それだけなんでしょう」「でもそれは解決した、と」

アマツチは言つた。

ポットからコーヒーのおかわりをつぎながら少年はゆっくりとした口調で言つた。

「そうですね、おわりました」

ティーカップを口に運ぶ。

「彼女おかげで」

と言つて彼はソファに目をやつた。

アマツチはポケットから新しいコインを取り出して、テーブルの上で回した。

新村はソファの少女の寝顔を見ながら、コレはきっと詳しい説明は受けられそうになつたから素直に受け止めれば、同じような時間に気を失つていたのだから、同じよ

「新村さんが思つてゐる事は判りますよ、多分、みんな同じ夢を見ただけなんです」「え？」

「僕たちが集められたのは偶然だったのか必然だったのかわからぬ、そんなゲームのような事がこの世の中で起きるのかどうかもわからない、だけど、実際に起つてしまつたのだから素直に受け止めれば、同じような時間に気を失つていたのだから、同じよ

うな事が各人に起つていたと考えるのはそんなに間違つた選択肢じゃないと僕は思うんです」

ただ、と彼はつづける。

「彼女だけが異様に不用意に深く深くコミニットしてしまった、「こでは口に出せないですが、きっとそのもの本体とコミニットした、僕たちにその役割が回ってきた事も十分に考えられます、だけどこの中じや一番彼女が適任だったんじゃないかと、僕はそう思いました」

「影を感じてしまった事がアマツチと同じで、君と同じように誰か大切な人を亡くしてしまった、オレはアマツチと行動をともにする事で鈍くなつてしまっていた、そういう事になるのか?」

新村が言った。

「僕は、そう言う事だと思いました」

少年が言った。

「それじやあまりにも話としてはシンプルだな」「確かにちょっとあつけなさ過ぎやしないかい?」

アマツチと新村が端的な感想を述べた。

「僕もそう思いますよ」

そして沈黙が降りる。

コインが遠心力を失つて倒れるときの乾いた音が、部屋中に響いた。  
そして、部屋は朝の光で一杯になつた。

「新村、無理を言つて、そして聞いてくれてありがとう」「え?」

「コレを逃すと期を逃すと思つて、割と照れくさいんだ」

アマツチが言った。

新村を見ているようで、その目はその先を見ているようにも見える。

「影は去つた、僕の脅威も去つた」

「家に帰れるな」

「送つてくれるか?」

ああ、と言いかけたところで、新村は幻覚の事を思い出した。

「だいじょうぶだ、あれらはもう居ない」

「やけに断定的だね」

「僕は天土俊哉だからね」

少年が口を開く。

「人に危害を加えるような幻覚はすぐに消えてしまうはずですし、もちろん特別なモノはあるのかもしれません、でもそれって例外的な事でしょう?」

と言つた。

「そう」

新村はその言葉を信じてもいいと思った。

幻覚はあくまで幻覚でしか無く、それが永遠にあるというような状況は幻覚ではなく、既にそこに存在する事になってしまっているのだ。逃げ水にせよ陽炎にせよ浮島にせよ、それらは刹那的なモノで、捕まえる事は出来ない、定着する事は幻覚には似合わない。

「少年、君は昨日見た事は口外してはいけないよ」

「はい?」

「僕の仕事はね、幻覚なんだよ」

といって、アマツチは笑つた。

「アハハ、そうですね」

少年は笑つた。

「そりゃ言えば叔父さん、ぼくもコインを回すことが出来ますよ、ほひ」と囁つて、自分のポケットから一枚のコインを取り出して、回した。

## 【epilogue】 少年と少女

「あのね、謝らなくちゃいけない事があるの」

「ん…」

遠くの方で、だけど妙にはつきりとした声が宗司の耳に届いた。

「あなたに何も言わずに、約束を破ってしまった事、私少し後悔している」  
声はどんどん近くなる。

やっと開けた目に飛び込んできたのは一面の緑色だった。

芝生の…上?

「美しい景色ね」

ついに声は、自分のすぐそばにまでやってきた。

「あなたがいつも見ている景色は本当にこんな穏やかな世界なのかしら?」

「ゲームの中では殆ど残酷なシーンばかりだよ」

口は動かせる事が判つた。

徐々にだが手足の感覚も戻つてきているように感じた。

「あなたは本当はそんな風に穏やかな世界を望んでいるのね」

「違うね、それに理李、君は僕の事を宗司君ともあなたとも言わない、君といつ一人称を使っていたはずだ」

「二人称で私を誰かつて決めてしまうの?」

「理李はそしてそんな風にして決めつけたような断定的な台詞は使わない」

全身の縛られているような感覚は徐々に解放されているように感じた。

「急がなくて良いのよ」

「判つてる、でも僕には理李が居なくなつたから、誰に助けを乞う事も出来ない、自分で何とかしなければならない」

「自分の力で何ともならない事は?」

「人の力を借りる」

「それが出来るかしら? そんな上手く切り替える事があなたに出来るかしら?」

彼女は楽しそうに笑つた。

「出来ないかもしれないな、理李に依存していた部分が多くある、僕の殆どの部分は理李と同じだった、：いや同じようにしていた、と言つた方が正しいのか、それとも同じようにしてもらつていたと言つた方が良い? どちらにしても混乱したよ、自分が死ぬ事はあったとしても理李が死ぬ事なんて考えても居なかつたから、そして今も混乱している、正直どんな風にして世の中を生きていって良いものか、全く見当もつかないで居ると」「ねだる」

「人に聞けるつて今言つたじゃない?」

樂しそうに彼女はわらう。

僕は少し困つて、彼女は笑つていそつた。

「理季は、僕に何も残さなかつた訳じやない、だから君が僕だつて事は判るよ」

「私があなた?」

「そうだよ、世の中の人たちが影や何かに縛られて疲れていくのは、君のような存在が居る事を認めたくないと思つてゐるからだ」

「何故気がついていた?」

「気がつくも何も、理季と僕はそう言う関係だつたから」

「そう? 私にはそんな風には思わなかつたけれど」

「君がどう思おうと君の勝手だけどね」

風が、吹いた。

「じゃあ、あんまり私があなたと会う必要はないんだなあ

と、彼女は言った。

やけに平坦な声だった。

逆光で顔はよく見えない。

「そんな事はないよ、僕だつて君と会うまでは君の存在を否定したかったんだから」

正直な感想を彼女に言つた。

「因果なモノね」

「何が因果か?」

と彼は言った。

「君が思つてゐるよりもずっと、もっと、理季は評価されるべき個体だつた筈なんだ、僕何かよりも、もっと何もかも」

「だからあなたに託したんじゃないの?」

「そう、僕には終わらせる役割を理季が与えた」

でも、と彼は言った。

「彼女の呪いはそんなモノじやなかつたよ」

呪い、その言葉が正しいのかは分からぬけれども、最初の失踪事件、そして自殺した希有なケースとして報告されている。

「彼女は意識を拡散させて、サイキッカと、その予備軍にその思いを運んだ、だからあ

なたの理李さんがえらばれたのは異例。本当はあなたが受け取るはずのメッセージを、理李さんが先に閲知してあなたに送らせないようにブロックした、あなたは知らないと思ふけれども、彼女、結構頑張っていたのよ、ああ、此所で言う彼女は理李さん。でも、限界は来る、すぐに爆発してしまいそうな勢い、衝動に駆られながら彼女は、彼女からのメッセージを何とか暴発させないように持ちこたえていた」と、そこで彼女は一つ言葉を句切つた。

柔らかい風が吹いている。

「ここは草原だ。

幻術的に美しい雲が、遠くの山々まで続いている。

「わたしもびっくりしたわ」

僕は答えない。

「あなたにこんな心のゆとりがあつて、こんなモノを望んでいたなんて」

「君は、僕だ、だけど、君は僕じゃない、…君は、誰だろう?」

と、彼は言つた。

「あなたが思つているモノで、間違つていないと思つんだけれども、どうして確認する必要があるのかしら?」

「君の、顔を見たいから」

「難しい質問ね」

風がゆっくりゆっくりと吹いている。

雲の形もそれに吊られるようにしてゆっくりゆっくりと動いている。

「君が、私の顔、覚えていないからややこしい事になるんだよ?」

と彼女は言つた。

「そうだな、悪いと思つているよ」

「嘘つき」

「今は、本當だよ。悪いと思つている、いや、君が居なくなつて遺影を見たときだな、僕は酷く後悔したよ、君が死んでしまつて悔しかつた事や、自分の片割れが居なくなつてしまつたような虚無感よりも強く、君は一人の人間であつた事を思い出せない自分が、君の顔や温もりを思い出せない自分に腹が立つた」と彼は言つた。

と彼は言つた。

「いまさら、だよ」

「今更、でも良い。だから許して欲しいとは思わない、でも、きちんと僕がこれから死なずに僕で居るために、理李の事を、君の事を覚えていたいんだ」

呟くように、そしてしかしあつさと彼は言つた。

「『判つてるよ、知つてるよ、大丈夫』と僕は言つた。愚かだったよ、何故簡単な事に

も気がつく事が出来なかつたんだろう、僕が若いからかもしれない、後悔は先にはないんだつて、学校でさえ教えてくれる事なのに、僕はその言葉を信じていなかつた、何とかなると、理季が何とかしてくれると思つてた、でももう居ない

それから、と、彼は立つた。

「だけど、理季の笑つている顔ぐらい、覚えておきたいんだ」と彼は言つた。

「彼女もやつぱり『明日』なんて言わなければよかつたのに、つて後悔しているみたい」と、理季の声の彼女は言つた。

「だからきっと、おあいこでいいんじゃないかな」やけにはつきりとした、さっぱりとした声だつた。

彼女はゆっくりと振り向いて、そして彼に手を振つた。